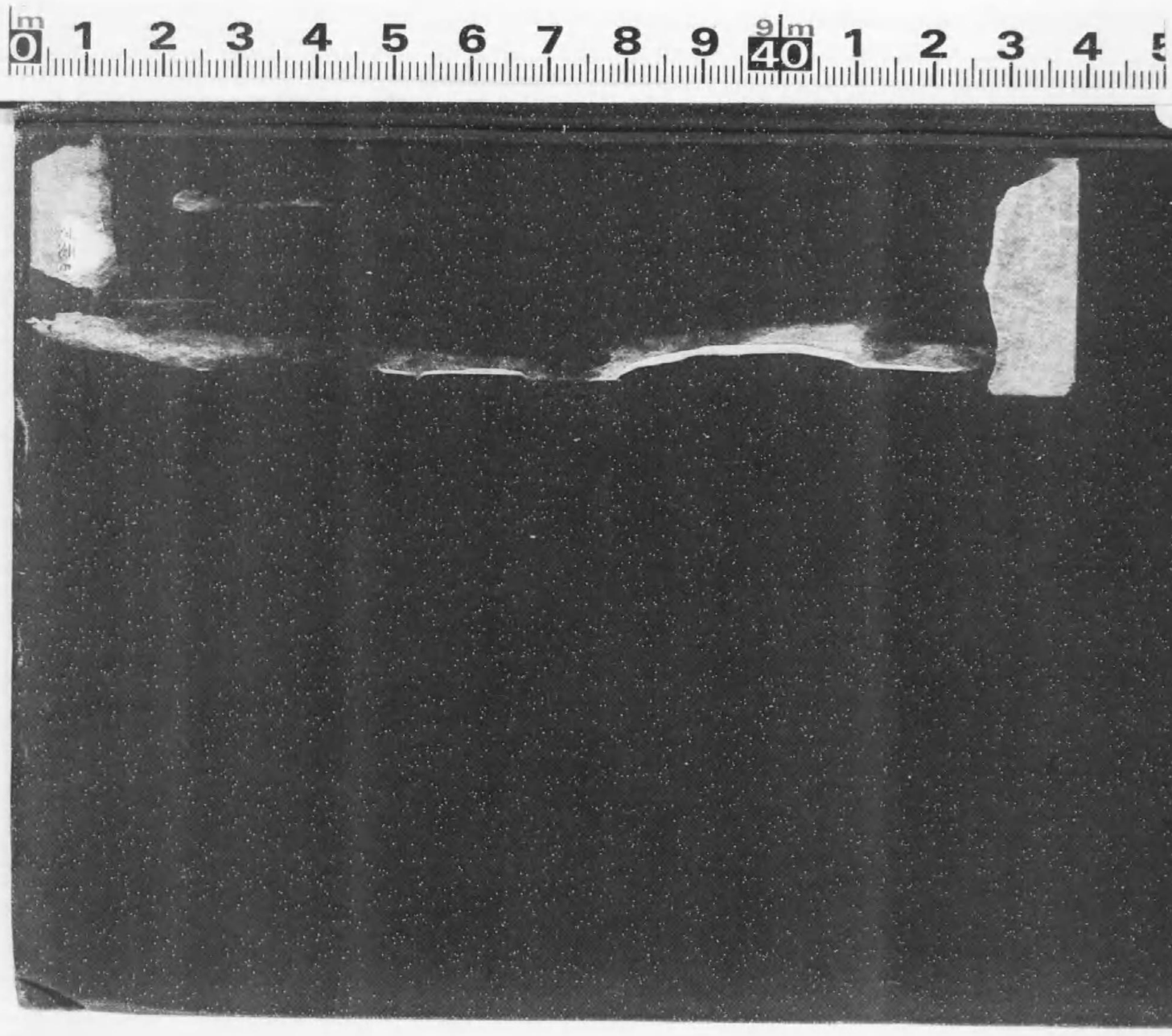

函
風 5
號
永久保存

貴重書
東洋文庫

支那情艷祕話

鴛鴦譜

桃義會著

特501
566

國立國會
54.3.-9
圖書館藏書

79W10017

鴛鴦譜序

萍水氏及茜花氏二君、日本之文學家也。著作頗富。文名滿天下。今又取我國今古奇觀中之鴛鴦譜一則、譯以和文。付之剞劂。傳之東瀛。與彼邦人士公同好。誠軼事中之軼事也。夫小說雖末技、其關於國家文章　政治　風俗　習慣　者不少、鴛鴦譜一則、尤爲我國舊小說中之傑作、余讀此篇、每嘆作者天性活潑、有提倡改良法律之表示、與打破專制婚姻之趨尙、至其文章之妙事實之奇、與構思之巧。尤爲餘事。不知萍水氏及茜花氏二君。譯此說爲傾仰喬公之事實耶。崇拜作者之思想耶。抑采風問俗介紹文化耶。吾知萍水氏及茜花氏二君。必有深意於其間也。緣識此以質萍水氏茜花氏。並質諸將來之愛讀斯文者。是爲叙。

中華民國十三年春

蔣作新識于申江

題鴛鴦譜

甲子之春、予事餘之暇、每晚輒與日友萍水氏茜花氏二君、煮茗挑燈作長談、或研究文學、或閑講故事、彌覺其樂也、嗣於小說今古奇觀中、見有喬太守亂點鴛鴦譜一節、二子以其情節離奇詞意婉轉、足可供彼邦人士茶餘酒後之消遣、因由茜花氏譯爲日文、且加萍水氏潤以詞飾、遂成一完美之小說、窃中日雖爲近隣、然風俗究各不同、予以爲得有小說作媒介。則中日之親善、將更進一層焉、書中寫我國社會之情狀、婚姻制度之不良、及小兒女嬌憨之態甚詳、且此事素膾炙人口、梨園且編爲劇本開演、非毫無價値者也、書成索序於予、爰畧誌數語以報之。

中華民國十三年春

桃義會許問蓉識

緒言

凡そ葛藤たるや互に其眞相に相觸れざるに於て生ず。小にしては個人、大にしては國家、皆然り。而して日支兩國は一韋帶水に位し、然も尙、相確執するや久し。卽ち兩國人相互間の諒解を失ふに歸因する事大なり。是れ吾人の最も痛嘆おく能はざる所なり。

されば茲に桃義會なるものを組織し、日支兩國人の志を共にする者相集り、互に其眞情を披瀝し親善の實績を收めん事を期す。故より小數微力にして、到底社會に貢獻する事能はずと雖も、吾人の至誠の萬一なりとも達成する事を期して、僭越の謗をも省ず、支那往古の文化風習を研究し、所謂其眞相に觸れ、普く公にし、以て世の識者の高評を仰ぎ度く切望する次第なりとす。

今回宋代奇譚鴛鴦譜を試譯するに當りては、華人許問蓉氏の助力を得、尙日人萍水氏の麗筆を煩したる事を兩氏に深く謝す。尙又、有名なる華人蔣作新氏より序文及び詩賦を贈られて卷頭に光彩を添へるの光榮を荷ひしは、同氏に對し感銘深謝する次第なり。

幸に御一讀の榮を賜らば幸甚。

大正十三年

桃義會茜花識

はしがき

戀愛は靈肉一如の抱擁である。然も、絶對の、永却の、實在の花である。然り乍ら、冷い因襲の枷楔が常に青春の花に闇影を投げて幾多若人の血を搔き亂し、受難の悶ゑに咽ばしめる事は今も昔も變りは無い。

茲に宋代九百年の往古に於ける、因襲と、愛との葛藤に波瀾を極めた奇譚、鴛鴦譜を御紹介する次第であるが、拙い自分には洵に潛越の謗を免れぬ事を充分覺悟の上である。幸に識者の御高致を給はらん事を乞ふ次第である。

大正十三年三月

萍水

目次

敎り行く花
苟且の床
花轎
合卺
歡樂の夢
泣春の譜
旋風
邂逅
太守の情
譯餘閒語
附錄小說（復讎）

題鴛鴦譜

日本萍水氏及茜花氏二君、譯我國舊小說今古奇觀中之喬太守亂點鴛鴦譜、韻事也、許問蓉君嘉其事、囑予爲序、因不揣冒昧、並作四絕、以助逸興。

蔣作新

婚姻說是赤繩牽、不是鴛鴦繫不連、
我羨喬公點新譜、爲嗔月老誤從前。
鴛鴦本不別嫌妍、顚倒嫌妍是惡緣、
我說當年喬太守、前身應是月中仙。
誰云佳偶是天成、强把鷄鸞繫赤繩、
不是清明喬太守、幾雙兒女怨終身。
喬公太守古今呼、亂點鴛鴦事有無、
中外文人多好擾、又將舊譜譯新書。

散り行く花

一

大宋の御代靜かに搖ぎ無い楚を定めて、四方の干戈の音も昔の夢かと、民々は鼓腹の喜びに浸つた、仁宗の景裕の世であつた。

錢塘の流れ淙々として、昔を語るその畔り、雷峰の高塔を晨夕に仰ぐ杭州の片田舍に、姓を孫と呼ぶ寡婦があつた。その寡婦に二人の子供があつて、姉を珠姨と呼び、弟を孫潤、字名を玉郎と呼んだ。父孫恒が二人の忘れ紀念をを襁褓の中に殘して、早く世を去つてから、母は貞節を守つて、一人の養娘を雇ひ入れ、子供の成長を只管樂として、淋しい世路を送つて居た。

月日の經つのは早いもので、二人の子供は段々、成長した。そして、昔からの慣せ通り、姉は劉家の劉璞と許嫁となり、弟玉郎は蕭家、徐雅の娘、文哥と許嫁を結んだ。

珠姨は天性窈窕として、西湖の水、吳山の月にも比すべき、美貌を持つて居た。剩へ縫ひ針其他、女の道の一つとして缺ける事もなく、母親にも至つて、孝行者で洵に才色雙美の乙女であつた。玉郎も亦姉に劣らぬ孝行者で、常に讀書を樂として孜々として、古聖賢の道に深く志して居た。

珠姨と許嫁の間柄である劉璞の家は程、遠からぬ町にあつて、父を劉秉義と呼び專ら醫療を業として、暮して居た。妻、談氏との間には劉璞の外に、尙一人の妹があつた。名を慧娘と呼んで、兄よりは一つ年下の、十五才であつた。慧娘も亦、容姿、楚々として、艶姿、豐麗、水も滴る許りの優さ姿であつた。そして、同じ町の藥舗の裴九老の息子、裴政と許嫁の仲であつた。

斯うして、互に因與の冷い羈絆に促れて、動きの取れぬ、運命の重荷を負ふ身であつた。

二

大古の秘密を包む西湖の水は鏡の如く澄み渡り、仰げば、斷雲の所々に星の涙は瞬いて、夜は只寂然と更け、萬象は總て默々と打ち沈んだ。飛來の峰は模糊として夜の帳に姿を匿し、彌陀　光の影はいづくか、只雲林寺の鐘のみ、いと淋しく、哀音切々として、水に擴がり顫ゐて行く。

折しも、いづくから現れたか、髪もおどろに振り亂した、夜目にも知るき手弱女が、物狂はしき物腰で、ひたと、岸へに駈け寄つた。唯薄寒い夜風に、軟かい身を曝して、岸の草葉の影と共に、凝つと湖面を凝視た。

永遠の謎を呟く、その水の面に、嫋やかな影を投じて、夕を渡す虹の綾とも例へるやうな、敢果ない身を、消ゐて行く幻影のやうに、幽闇の徑路に、今や立ち迷つて、唯潛々と泣き入るのみであつた。

長夜、五更の夢破られた、妖女の精の現出とも見れば、見られやう、夜氣、水の如く澄み渡つて、月となるべき空明りに、悽惋なその面は唯ほの白い花辨の、やがて來る凋落の春を追つて、怨み咽ぶがやうにも見えた。

彼は悶ゆるその胸を固くうち抱いて、暫し嗚咽に、打ち顫えて居たが、軈て、その美しい兩掌を合して、何事か念じては又、瞑想に打耽つた。心は千筋の糸の如くに亂れ、涙は滾々として、止めも度無く、身も世もあらぬ惱しさに身悶へて、又も立ち上つて、キツと、湖面を眺め入つた。渺々と、打ち展けた水の面は曇り無い鏡のやうに澄み、今はの惱み多いその容姿を髣髴として、浮べた。

遂に、思ひ余つて、彼は吸はれるやうに水の面に身を近よせたが、又慄いて、袖に顔を埋め乍ら、よゝと咽んだ。

『私は怎ふすればよいのだらう……』

と、呟いて、懐しい父の名、母の名、兄の名を一と通り呼んで見た。湖の底から優しい返事があるやうにも思はれる。皆の顔を胸の中に一つ〳〵描いて見た。水の面には優しい顔が映つたやうに思はれる。

『玉郎樣、玉郎樣』

今度は懐しい人の名を力籠めて、呼んだ。

『お父樣、お母樣、先立ちます罪は……』

聲はたえて、遂に涙となつて消えて行く。

『玉郎樣、あの世では屹度忘れずに……』

聲涙偕に下つて、涙は水の面に溢れ落ちた。

『今は皆樣最後の御別れで……』

咽ぶが如く、顫ふが如く吊ふが如き鐘の哀韻に、涙の聲は搔き消に、月も哀れと思つてかその美しい姿を雲に隱して、偲び泣くかと思はれる。

惡魔の會心の笑を洩すかのやうな悠やかな波紋を名殘として、美しい手弱女の姿

は謎の湖の中にかき消えて、散り行く花の行方も知らずなり果てた。空には星の涙がキラ〳〵と輝めいた。

空行く雲
地を逝く水
追憶の夢今消えて
我も逝く
現はもろき人の世に
運命を過去に葬りて
闇と眠りと死の影に
怪しう狂ふ回想の
唯一輪の戀の花
つきぬ名殘の惜まれて

散り行く春の憂き涙
冷き悲情の水の上に

苟且の床

一

劉秉義は二人の我子の成長を娯んで、月日を送つて居たが、劉璞も早や年頃にもなつたし、又妹も早晩嫁づけねばならんので、兄の結婚を早く取り行ひ度いものと思つて居た。

遇々、裴九老は人をして、慧娘の輿入れを申込んで來た。

『いづくの親も子を想ふ心は仝じで、九老の心の内も察する事は出來るが、我家に取つては先づ兄の結婚を濟ましてから妹の方に取りかゝるのが順序でもあり、又種々の粧奩も未だ取り揃つては居らず、するので伜の結婚の濟むまでお待ちを願ひ度い』

この返事を託して、媒人を返した。

所が、裴九老も寄る年波に只一人の最愛の子供の行末も思はれて、一刻も早く身を

固めて、可愛いゝ孫の顔も見度いこと、願ふ心の焦々として居たので、乘義からの返事も耳に這入らず、

更に人を遣して、

『令愛も十五才なら早い事も無く、自分の家に引取つても、決して粗末に思はない、又粧奩の整つて居ない位の事は少しも差閊へないから』

こと、請はしめた。

然し、乘義は同じ言葉を述べて、猶豫を乞ふのみであつた。後更に重ねて、請んで見たが、一向に埒が開かなんだので、流石の九老も致し方無く、一日千秋の思ひで色良い返事を待つ事にした。

劉乘義は妹の問題も恁うして起つて來るので、伴の結婚も自然忙がねばならぬ立場となつたそこで、媒人張六嫂をして、孫家へ遣り、珠姨を貰ひ受ける日取りを申込んだ。

この世は全く走馬燈の廻るが如く、昨日の人の身は今日の我が身の上であつた。

所で、孫寡婦は喜んで承諾した。そして、

『御承知の通り妾は早く夫に別れて、女一人の痩せ腕で、細々乍らも、生活の煙を揚げかねて居る次第であります。娘の一生一代の晴れの場合乍ら、思ふやうに粧奩も整はず、洵にお恥しい次第でありますが、御察を願ひます』

こと、謙讓な挨拶であつた。

張六嫂は取るものも取りあへず劉家へ取つて返して、この由を乘義へ告げた。乘義夫婦も、大喜びで、吉日を撰んで通知し、八盒羹菓の禮物を用意して、孫家へ贈つた。

その後、孫寡婦は娘の仕度で忙しく、一日ノ〳〵吉日の近づくのが洵に氣忙しかつたが、又、年頃慈み育てた我子を今俄に手放し了てふ心淋しさを、思はわぬ譯には行かなかつた。

二

月には雲、花には嵐の習ひかや、黄道吉日の迫つて來るのを眼前に控へて、劉璞はふと、苟且の床に就く身と成つた。初めは何でも無いと思つたが、一寸には頭が上りそうにも見へなかつた。吉日は切迫して來るのに息子の病は一日〳〵と難しく成つて行くので、兩親の心配は一と通りでは無かつた。醫者よ、藥よと、擾ぐほど病が重り、今は到底回復も覺束なく見ゆるので、所詮、神か佛の御手に縋るより外に、道が無いと思つたので、兩親は狂氣の如く成つて、加治祈禱を怠らなかつたが一向にその効驗も見へなかつた。

秉義はある時、枕頭に待して、夜の目も寢らぬ妻を祕に呼んで、悲痛の面持もで

『斯うまで手を盡して見たが、中々に回復が難かしい。私の見る所では、到底駄目だろうと思ふ』。

聲を落して涙の目で、凝つと妻を見た。勝氣な劉妻も、連日の氣苦勞やら、身體の疲れで、甚しく窶れて見へた。

『駄目でせうか』

『諦めねばならんだらう』

と、兩人は只嘆息を漏す外、何の言葉も無かつた。

やゝあつて劉公は、

『息子の婚儀の日も余す所僅かとなつたが、どうしたものだらう』

『……』

劉妻もかうした芽出度い日を前にして、不吉な心配をせねばならぬ身が熟々悲しく成つて、又新しい泪を袖にした。

『俺の考では、この際一寸先方に通知して、婚儀の日を暫く延して貰ふより外は無いと思ふ。病が治つてから、其の上で取り定めても、遲くは無いと思ふんだがな』

これを聞いて、劉妻も稍氣色ばんで、

『你はごちらの都合を考へて被らしやるの』

『言ふ迄でも無く、雙方の爲さ』

『此の婚儀を延して、先方の爲に成つても、此の方の爲には成ら無いじやありませんか』

『爲に成る成らんより、あの病人では仕方が無いではないか』

妻は色を成して、

『你でも有らう人に似合ぬ御言葉と思ひます。昔から病氣は悪魔が附いて居て、その悪魔は最も嬉しい人間の吉事に遭つては、必ず退散すると云はれて居ります。だから此の事は、一つ斷行して、息子の心を喜ばし、勵してやらねばなりません。それが何よりだと思ひます。それにもうこの通り、日取りも定まつてある事でもありますし』

『そんなら萬一、あれが駄目だつたらごうする』

『你、そんな不吉な話は止しませう。あの子に限つて大丈夫ですよ』

『それでも萬一、貰つた後で、死んだ場合は、先方の娘には氣の毒であるし、世間の評判も悪くなるよ』

『你は他人の事まで慮つて居ては、切りがありません。この婚儀の爲に息子の病が、治るとしたら、これ程經構な事は無いではありませんか』

『そりや、治れば構構さ』

『でも、治らぬと限つたものでもありますまい、萬一にも、貰はぬさきに病が革つたら、贈つた品物は先方に唯取られて、一つも利する所がないではありませんか又貰つてから、あの子が死にでもしたらば、此方から改めて、他家へ嫁にやる事が出來る。そうすれば、此の方の支拂つた費用も、又歸つて來ると云ふもの、ね、そうじやありませんか、中々先方へは、尠く無い物を贈つてあるのですからね』

『では、お前は約束通りの吉日に、貰ふ積りだね』

『勿論の事です、結婚式の當日は、息子が一寸した風邪の爲に、大事を取つて臥して居るから新娘子だけを迎へて、一兩日して、病の癒り次第に擧式をするからと云ふ事にして、息子の大病の事は先方へ秘して置けば良いではありませんか』

劉公も今は詮方なく、妻の言葉に隨つて、何事も任してしまつた。そして、張六嫂に此の旨を含めて、倅の病氣を固く秘めた。

三

劉秉義の隣家に李榮と云ふ者があつた。此奴は常に良く無い事をして金を儲け、又よく人の惡口を告げて歩く癖があつた。

彼は秉義の家の一部を手に入れ度く思つて居たが、劉公は讓り渡す事を拒絶したので、それを恨に思つて居た。惡人の例として、其後劉家に災難あれかしと、念じて

居つた。その矢先き、今度の一部始終耳にしたので、是れ幸と、その足で孫寡婦の所へ行つて尾に鰭附けて、喋舌つてしまつた。

孫家では、こは娘の身の一大事であると思ひ、早速張六嫂を呼びに遣つて、右の事狀を訊いた。

張六嫂も、劉家からは固く口止めされて居るが、今眞實の事を言つて置かぬと、萬一後で劉璞の方に變つた事があつたら、自分は孫寡婦から、怨を受なければならず、さりとて、明らさまに話す譯には行かず、どうしたものかと非常に到惑したが意を決して、劉公から云はれた通り、

『何でも無いのですよ、一寸した風邪の爲に臥して居るのですが、多分婚儀日迄には全快するでせう。もし、全快せなかつたら、折角定めた吉日の事故、新娘子の身體だけの輿入れとして、儀式は後廻しに爲てもよろしいが、多分その日迄には大丈夫療るでせう』

と云つた。

然し、寡婦にして見れば、李から聞いたのと大違の話故、中々信用できなかつた

『何も秘す必要がないから、ありの儘語つて下さい。こちらも、大事の娘の一生一代の大切の場合ですから、あなたも媒人と爲つて吳れる親切の有る人故、ごうか眞實を聞かせて下さい。若し、病氣が重いのなら、何も慌てゝ決めなくても、療るまで待つても、遲くはありません』

然し、張六嫂は相變らず同じ事を繰返すのみであつた。寡婦も信用が出來ないので、念の爲娘の女婿劉璞の見舞として、我家の養娘を劉家に遣し、其の實否を訊さうと思つたので、張六嫂の暇を告げて歸らうとする時、養娘を伴つて行くやうに賴んだ。是れは張六嫂に取つては頗る迷惑な譯で、再參、

『その義には及ばぬ』

と、拒絕したが、中々寡婦も肯かず、するので、止むを得ず、養娘を同道して、

歸る事にした。寡婦は養娘の耳許に囁いて、何か意を含めた。

張六嫂も、

『はて、困つた事だ、この人を劉家に連れて行つたら、何も斯も、判つて終ふのみならず、劉妻の激怒を買つて、結局自分の立場を全く、失つて終ふ。何か良い分別でも』

と、一歩〳〵思案に暮れ乍ら、力なく歸つで來た。

四

恰度その時、折良くも、劉秉義の外出するのに出くわした。幸な事には、養娘が劉公の顏を見知り無いのを奇禍として、

『你（アナタ）、一寸待つて下さい。あそこが劉家です。私は今來る人に一寸用事があるから、暫く辛抱して下さい』

と、養娘を待たせて置いて、劉公に遇ひ、一部始終を物語つて、養娘の來て居る事も述べた劉公も驚いて、顔を曇らせたが、扨て、何の思案も附かなかつた。

『お前は何故養娘を引張つて來たのだ』

案の如くに、頭から叱られた。

『私もさんざ拒つたのですが、孫寡婦か肯かぬものですから、よん所なく、一緒に來ました私の不都合は幾重にも、御詫致しますが、今はもう、そんな事をいつて居る時ではありません一刻も早く、此の事を大娘に相談して、何とか、良い方法を構じて下さい』

二人は何と無く慌しげに話して居るものだから、養養は一歩〳〵さあらぬ體にて近附いて來た。張六嫂も今は詮方なく、養娘を手招いて、

『此の御方が劉老爺です』

と、紹介した。

養娘は丁寧に身を跼めて、萬福と、いつて挨拶をした。

『小娘子、どうぞ中へ御這入り下さい。ようこそ御出で下さいました。さあ〳〵』

劉公は如才無く彼女を案内して、一室に待して置いた。そして、急いで妻の許へ駈け附けて委細の話をした。

妻も到惑したが。今更致方が無いので、娘の慧娘に耳打ちして、新房間を綺麗に掃除して種々の飾をして置くやうに命じて、容間に現れた。

初對面の挨拶も濟んで、養娘は

『手前の大娘は大官人の御病氣の由を聞いて、大變心配して居りますので、此の際一寸私に御見舞申して來いとの事で、參りました』

『御親切に有難う、いや、何でも無いのですよ、一寸した風邪で、此の兩三日前から臥つて居るのです。程なく癒ると思つて居りますが』

と、劉妻はさり氣なく言つた。

『それは、お輕くて結構です。噂によると、大分御容態が御悪いらしいと承りましたが』

養娘は尙も迂散くささうに、凝と劉妻の顏色を窺つた。

『いや、世間は何を噂する事やら、兎角、物事を大業に云ふのが、世間の癖で、迷惑な事です』

劉妻は鼻の先で笑つて見せた。養娘は委細構はず、

『御病氣中ならば、例の輿入れの儀を暫く、御延引になつては如何ですか、大官人の御快癒を待つて、その上で取り行つた方が、御互に都合良からうと、大娘も申して居ります』

劉妻は慌てゝ、

『いや、今も申上げましたやうにほんの、風邪位の事故、明日あたり起き事が出來るかも知れぬと思ひます。洵、病が重くて、延引せなければならぬのでありましたら、又此方から申出まする程に、その御心配に及ぶまいと存じます。又我々のやうな貧しい家では、此樣な儀式の物要りは中々大體ならぬ負担になるのです。それに、末だ娘を嫁ける話も急いで居りますので傍々どうしても延引は出來ないのです』

劉妻は口に任して、辯じたてたが、尙言葉を繼いで、

『人間は多少身心に曇があつても、此の樣な吉事が取り行はれる事によつては、全快するものですよ、御承知の通り、病氣で無い人でも、結婚の時には態々、僞病をつかつて、儀式を質素にする世間の例もある位ですもの、病氣だからつて、少しも差閊へは無いではありませんか、又眞正の病氣に罹つたので、態々病中に媳婦を貰つて、病神を追ひ出す家もあるではありませんか。もう小娘、此方も吉日も定まつてあるし、親戚、知己へ喜筵も配つた後ですもの、今更どうかう言つた所で、その人達にも聞ゐが悪いと思ひます。どうか私の意のある所を大娘によろひく傳へてください』

劉妻は懸命に喋舌り續けた。養娘も、それでもと、云ひ兼ねて、

『いや、御尤です、その通り申し傳へるでありませう』

と、承知した。

劉妻もホッと、安心の息を吐いたが、

養娘は、

『それでは、一寸大官人に御目に掛つて歸りませう、そうすれば、歸つて、孫大娘にも安心して貰へると思ひますので』

と、今度は婉曲に鋭く詰め寄つた。劉妻も是れには心中一寸閉口垂れたが、さあらぬ體にて、

『いや、御親切に有難う、是非さうして頂きませう。今しがた汗のする藥を呑みましたから或は寢て居るかも知れません』

『張六嫂や、一寸行て見て來て御覽』

と、劉妻は眼配せして、張六嫂を立たしめた。間もなく張六嫂は坐に歸つて、

『只今汗をして、能く寢込んで居られます。今一時許りは、起さぬ方が良いと思ひますが』

と、巧に返事をした。養娘も今は致方無く、凝つと考へた。

張六嫂は言葉を挿んで、

『私が御宅へ參つた節、大した病氣で無い事を申上げたのですが、孫大娘は私を信用なさらずに、あなたを見舞に越されたのですが、今になつて、私の話の眞實であつた事が、御判りになりませう』

『いや、能く解りました。では、御暇致しませう』

養娘も致方なく立ち上つた。

劉妻は慌てて、

『おや、もう御歸りですか、話に氣を取られて、御茶を差上げず、失禮致しました

さあさあ、一寸此方へ御越し下さい』

と、先に立つて養娘を新房間へ案内した。室内は慧娘によつて、非常に能く方附けられて、至極立派に見へた。

『小娘、御覽の通り、室内は此の通り準備してあります。こちらでは、皆が新娘子を待ち焦れて居るのですよ。だから、どうして延す事が出來ませうか、多分それ迄には息すも癒つて呉れるこ思ひますが、萬が一にも、身體がまだ瞭りしませんなんだら、新娘子は私の室で寢させます。』

養娘も始めは變に思つて居たが、劉妻の巧な言葉や、新房間の美しい裝飾に魅せられて、疑雲の晴れるやうな心地がした。

其處へ慧娘は茶や、お菓子を運んで、彼に侑めて、下へも置かず疑待した。養娘は慧娘の嬋娟な妖姿を見て、心秘かに驚いた。孫家の珠姨ほど美しい人は無いこ思つたが、此の子は更に幾倍した容貌であるこ思つて見惚れた。

花轎

扨て日も西に傾いて、茜を染めた空の色が美しい新房間を彩つて、更に一段の光彩を添へた。並居る人の面も亦美しく照り映ゐた。

養娘も手厚い待遇に感謝して、歸り仕度した、劉妻は孫寡婦に傚つて、又々張六嫂に意を含めて、返事を問き傍々養娘に同道せしめた。養娘は立ち歸つて、孫寡婦に殘らず始終を語つた。寡婦も心中養娘の話の總てを信じる譯には行かなかつた。

從つて張六嫂に明瞭な返事を與へる事は躊躇せられたので、

『明日、確な御返事するから、それまで猶豫下さい』

と、願つて張六嫂を歸して了つた。そして寡婦は玉郎を呼んで協議した。

『若し承諾して、娘を遣つてから萬一、死にでもしたら大變だし、延期を願つて先方の言ふやうな輕病であつたら吉日のよい機會を失つて、多數の人に迷惑を掛け

る譯であるし、はて困つた事だ』

と、いと到惑した。玉郎の曰ふのには、

『姆嬌(オカア)さん。劉璞の病は屹度重いに違ひありません。養娘が會はふと曰ふのに、先方は會さなかつたのが何よりの證據ではありませんか。ですから、吉日はごうしても延さなきやなりません』

『さうさね、私もそんな氣もするが、延期するとなると、先方からの澤山な禮物を不意にする樣になるかも知れないが、それは致方ないとしても、先方では已に親類や知己に喜筵を廻してある由で、大勢の人々に迷惑を掛ける事となるから、何か良い方法は無いものか……』

『それでは姆嬌さん。斯うしては如何ですか』

玉郎は一策を案じた。

『どうするのだね』

『吉日は先方の曰ふ通り改めないで、その代り當日は粧奩も何も運ばず、ほんの身體だけの輿入れとして行くのです。そして三日經つてから一度還して貰ふのですそれから病氣が癒り次第改めて粧奩と一緒に行くと、斯うしては如何ですか』

孫寡婦も小首を傾けて居たが、

『それはお前、子供の曰ふこ事だ。身體だけ遣るのはよいが、先方は三日經つて還さなかつたら如何する、還へして吳れゝば申分は無いさ、中々さうは行くまいよ』

『それじや、姆嬌さん。如何するのです』

『そうさねェ』

兩人は又沈默に落ちた。稍あつて、今度は母親が一策を案じた。

『そうだ、それでは斯うしよう。玉郎、お前が姉さんの身代りになるのだ』

『ェ、ェ、私が』

『そうだ、汝が』

『それは一體、怎うするのです』
『汝が姉さんの代りに成つて、女の樣に髪を結つて行くのです』
『私が、私が身代りに』
玉郎は呆れた。
『そうだ、そうして三日經つて還して貰ふのだ。先方が萬一、還へさなかつたら仕方が無いから暫く辛抱してゐるのです。其内に養娘を遣るなり、人を遣るなりして、還へして貰ふやうにするからね』
是れには道の玉郎も到惑した。母は言葉を繼いで、
『皮箱の中へは、お前の着物や、鞋襪を匿して持つて行くのです。萬一、先方が死にでもしたらば、早速その箱の中の着物を着るのです。さうすれば、先方も仕方無しにお前を還へすさ』
玉郎は怎う考へてもそれは出來そうに無いと思つた。

『姆嬌さん。折角の仰せですが、それだけは私には出來ません。那樣事をして、若し世間へ知れでもしたら、私は耻しくて生きて居る譯には行きません』
『那樣事が有るか、例へ世間が知つても、親の命令でお前が行つたのだ、何も耻じるにあたるまい。世間を心配して居たら切りがありませんよ。姉さんを助け、お母さんに孝行しやうと思つたら、汝が甚麼火の中へでも、飛び込む勇氣が無ければなりません』
孝行者の玉郎は動かす事の出來ぬ母の嚴命に、今は、肯かぬ譯には行かなくなつて、氣の進まぬ乍ら承諾した。
『姆嬌さん、私は髪を結ぶ事は出來ません』
『養娘が附いて居るから、髪の心配は要りません』
『それでは、そうと定めませう』
と、尙ほ種々相談をした。二人は漸く總ての策戰を立てゝ、

『ホッ』

と、安堵の息を吐いた時には、淨慈寺の鐘が靜かに余韻を水に顫はせて、曉を告げ渡つた。

『おや、大變手間取つた、玉郎。お前も一ど寢みなさい、私も一寸寢むから』

と、二人は暫しの床にまごろんだ。

早朝に、張六嫂がやつて來たので、孫寡婦は、

『吉日の延期は、せぬ代り、三日經つたら、是非一度還へして貰ひ度い。此の約束が出來るならば、當日珠姨を遣りませう』

その事に劉家も同意した。そして、雙方から來るべき吉日を待つた。

二

愈々當日になつて、玉郎に女の裝ひを附けしめた。天性、滑かな白い肌に緣の黑髪を取り上げて、極彩の晴れ着を附けた姿は姉に勝つても劣らぬ艶かさであつた。そして女としての振舞を事細かく練習せしめたが、怎うしても眞似の出來ない事が二つ有つた。一つは脚で、男と女との大きさが甚だ違つて居た。(古來からの風習である纏足の爲に女は脚が小さかつた。)玉郎の脚は珠姨のそれに三倍の大であつて、女のやうに裙の下から、ほんの尠かの爪先だけを見せて、恰も春の花が風に散るやう、胡喋が翼を翻すやう、一歩〳〵優やかに蓮歩を運ぶ事が出來ない。いくら長い裙を穿いて悠り歩んでも、怎うしても、相違があつた。然し足は下の方だから、まだ匿せぬ事も無かつた。

第二は耳であつた。耳に耳飾りを嵌める穴が無い、是れは祕す事の出來ぬ難事である。甚那女でも、耳環の無い者は無い、怎那に貧しくても、銅か錫の物は必ず嵌めて居る。今、玉郎が珠や翠の美しい飾りを頭に戴いて居り乍ら、耳飾りが無かつたら、新娘子とは誰が見るであらう。然し玉郎は左の耳に一つの穴があつた。是れは

幼時病弱であつたので、死から遁れ得るやう繋ぎ留めるこ、謂ふ迷信から、輪を嵌めて居つたのである。是れは此の場合、寔に幸な事であつたが、拘て右の耳は怎うする事も出來なんだ。寡婦も考へに考へ抜いた揚句、養娘に命じて、膏藥を右の耳に貼らしめた。そして、

『若し他の人が尋ねたらば、折惡しく疵瘡が出來たので、耳飾りを嵌める事が出來ないこ云ひなさい』

こ、敎へた。是れで、總ての用意が出來たので、姉の珠姨を一室に匿して、迎への花轎を待つた。

三

その日も早や黄昏れて、名殘の臙脂を流した雲の色が撞き出す鐘の一杵〳〵に、かき消ねて家々の燈火は空の星こ共に瞬き出した。間も無く鼓樂の響が近づいて來た。

玉郎の胸は慌しく轟いた。

やがて美しい花轎が門前に止まつた。張六嫂は先に立つて這入つて來た。そして新しく晴れ着に飾り立てられた天女の如うに妖艶な新娘子を見て、心中尠からず喜んだ。遉に珠姨は美しい、こんな新娘子を伴つて行く自分こそ、肩身が廣いこ感じられた。寡婦も心中、張六嫂の氣の附かないらしいのを見て、ホッこゝ安心した。

張六嫂は彼方、此方こ見廻して、

『玉郎殿は何處へ行きましたか』

こ、尋ねた。

寡婦は何氣なき體にて、

『彼は昨日から身體の具合が惡いこ云ふので、別室に寢させてあります』

『おや、それは御氣の毒な事です。まあ御大切に』

と、云つた切り、玉郎の事はそれ以來、口にはせなかつた。孫家では迎へに來た人に馳走して勞を犒つた。それが濟むと、新娘子は悠然として、花轎に乘り移つた紅緋の被衣を翻へし、雪より白い顏を花恥しき錦綾の晴の裳衣に半ば埋めて、面映ゆげに會釋を殘して、天使の樣な容姿は花轎の扉に隱れた。寡婦も聲を揚げて、悲しき別の泪を濺いだ養娘も張六嫂も其他親戚一同之に從つた。孫寡婦は張六嫂に

『御如才も無いことですが、約束ですから、三日經つたら是非一度還へして下さいよ』

別れに際して又、念を押した。

『承知致しました』

張六嫂も明瞭に答へて、別れた。

花轎の後には皮箱が續いた。

宵月の影は參差として、嫦娥の袖を花轎に投げ與へ、樂人の吹奏する笙、簫、鼓の音は劉亮として、寂寞を破り、紅の燭燈は高く捧げられて、只蕭條の路上に蕭々として續いた。

いざよい月の朧夜を
玉藻に變へし優姿
だゝ花轎に身を寄せて
妙なる奏高らかに
行くや白狐と誰か知る

合

巹

一

やがて、今宵を晴れと飾り立てた劉家の門前に到着した。儐相は、先づ門内に進み入り、大聲で、

『只今到着』『只今到着』

と、觸れたが、新官人の出迎の無いのを見て、

『出迎へは如何に、出迎は如何』

と、呼ばわつた。劉家では致方無しに、娘の慧娘を劉璞の代理として、新娘子を出迎へしめた。

新娘子は花轎の中から悠然と下り立つた。養娘と、張六嫂は其手を引いて、客室に案内した。

此の時、樂人の奏樂、今を曠れと、天地の神々にも聞し召せよと許り、高らかで

あつた。

やがて、爆竹の音高く響いて、一同は設けの席に着いた。新娘子と慧娘は、形の如くに、式を始めた。兩人は先づ、天地に三拜九拜した。續いて、劉公、劉妻を拜み、親戚一同に挨拶した。新官人ならぬ女性の慧娘が、新娘子と共に合巹の式を終へたので、人々は奇しき此の場の樣子を見て、可笑しく思つた。式が濟んで、劉妻は、新娘子に、息子の部屋へ行つて、早く病魔を追拂つて吳れるやうにと、乞ふたので。彼は云はれるまゝに恐る〳〵、新官人の部屋へ行つた。

奏樂の音は又一段高く張り上げられ、新娘子は劉璞の部屋に這入つて、靜にその床に近づいた。劉妻は帳子を揚げて、

『今宵は汝に取つて、こんな芽出度い事は無い、今こそ新娘子が、汝の魅を追ひ除けて吳れるのだよ。さあ、早く全快してお吳れよ』

と、脊中を撫でたが、返事は更に無い。燈火をさし寄て、能く〳〵見れば、此は如何に、劉璞は枕を外して横り、早や冷く成つて釋れて居る。身體が衰弱して居る上に、音高い奏樂を長らく連けられたので、神經昏亂したのであろう。劉妻始め一同は迎天してしまつた。

『水よ』『水よ』『早く』

喚き、叫んで、狼狽した。聲を聞き附けて、大勢の人々は斯けつけて、上を下への大修羅場となつた。人々の介抱に依つて、劉璞はやつと、息を吹き返したが、秉義の心配は一方で無く枕頭に獨り詰切つて、看護した。やがて劉妻は、かくてはならぬと思つたので　新娘子を新房間へ伴つて、始めて彼の頭の緋の被衣を取り除いた。

花の唇、月の媚、墨黑々とした綠の髮、雪にも勝る豐麗の氣高いその容姿は、月宮殿の天使としか思へぬ狀態であつた。劉妻は勿論、並び居る人も『アッ』と、感嘆せぬ者のは無かつた。劉妻も此の美しい新娘子を見るに附けても、心に掛るのは

息子の病である。兩人が茲に相揃つて、雄蝶、雌蝶の美しい翅を並べて居るので有つたら、甚那に幸福であろうと思つた。賴の綱のはかり知れぬ、劉璞の病狀を思ふと、此の美しい新娘子も我家の者になるや、ならぬや、不安の予感を伴つて、彼は悲喜、交々、萬感胸にさし迫つて、人知れぬ涙に搔き暮れた。

新娘子の玉郎は眼を上げて、始めて、一座を見渡した。錦綾、紅白の瓔珞や、燦然たる花燭の耀きよりも、又多數の美裝をした。賓客の誰彼よりも、强く彼の眼を射たのは、實に慧娘の容姿であつた。

蛾眉帶秀
鳳眼含情
腰如弱柳臨風
面似嬌花拂水
體態輕盈

漢家飛燕同稱
性格風流
吳國西施並美
蕊宮仙子謫人間
月殿嫦娥臨下界

の容詞も未だ遠く及ばぬ位に彼は魅せられた。

自分も男子として、寔や、今宵の合巹の睦みが眞正に我が物で有つたら、如何許り幸福であらうかと、淡い羨しさに身悶えした。彼の眼には、あたりの情景が何だが夢か幻の如く、只眞白く燦いた慧娘の面を中心として、有ゆる萬象は皆融けて渦卷いて、走るかのやうに見えた。我身も危く、渦の中に捲き込まれるやうで、身體は怪しく蹌踉いた。

慧娘は美しい手で彼を支へて、

『嫂々(チエサン)、氣分が御悪いのではありませんか、定めし、先程の擾ぎで、御心配であつたでせう』

と、優しく囁いた。玉郎はハッと、我に返つて、

『いゝね、有難う』

と、微かに答へて、嫣然とした。

慧娘は心の内で珠姨は美しいとの評判であつたが、なるほど斯うして見ると、噂に勝る優艶さである。兄が達者で今日の幸福を受けられるものあつたら、どんなに果報者であろうと思つた。自分の未來の配遇者も、斯那に心を惹きつける美しい人であればよいが、等と思つても見た。又今宵の此の蕾の花も、やがては嵐の前の運命のやうに、暖い懐に抱かれずじまいに、散つて行くかと思ふと、いとど、不憫であると、思つた。多分列座の人々も、然か思つたであらう。

譬へば、此の新娘子が、楚々嫋々、雨に濕ふ梨花であれば、慧娘は、嬋娟婀娜と

した、緋牡丹であらう。いづれを右とも、左とも。見分け難い、此の一雙の花の蕾に、人々は只恍惚として眺め入る許りであつた。

二

斯うして世にも稀な美人同志の合巹の式は又と無い珍現象であつて。全く月下の氷人の戯れで無くては、何であらうと、人々は思つた。

夜は次第に更け、盃の數も次第に増して、一同は歡を盡して解散した。儐相、樂人等も、各、心附けをおし戴いて歸つて行つた。

張六嫂も亦、歸つて行つた。玉郎は始めて、ホッと、我に返つた。養娘は彼の頭上の瓔珞を取り下りして、玉郎を休息せしめた。別室で劉妻は劉公に向つて、

『あなた、彼の美しい新娘子を獨り寢さすのは惜いそうですから、怎うしたものでせう』

『仕方が無いさ、獨りで寢さすんだ』
『慧娘と一緒に寢させては如何でせうか』
『いや、那樣、必要は無からう』
『でもそれでは余り可哀相ですよ、何も女同志だから關はないじやありませんか
兩人とも心易くして置いてやるのも、後々の爲ですから』
『そんなら、お前の思ふ通りにするがよい』
劉妻は慧娘に新房間へ行つて寢る樣に命じた。そして、
『そうすれば新娘子も淋しく無いし、又兩人は心易くすることが出來る』
と、曰つた。慧娘は新娘子を一目見た時から、何と無く心を惹けられる樣な氣が
するので、心の中では、さうする方が嬉しかつた。劉妻は慧娘を新房間へ連れて行
き新娘子に向つて、
『あなたの丈夫は不幸にして、病氣ですから、今宵は一緒に寢む事は出來ません

然し二三日經てば、回復するだらうと思ひますから、氣を惡くしないやうにして下
さい。定めし、お淋しいだらうと、思ふので、今宵は慧娘と一緒に寢ることにしま
したから、そのつもりで、仲よくしてやつて下さい』
と、曰ふ。玉郎は驚いて、
『いゝね、いゝね、私は淋しい事は少しもありません。その御心配は御無用の事
です。私は獨りで寢さして頂きたう御座います』
と、拒つた。所が、劉妻は中々頑として、肯き入れない。
『お前等二人は何れも、姑娘同志で、年輩も相似て居るし、是れから先も仲良く
せねばなりません。正眞の姉妹も同樣なんですよ。だから、一緒に寢るのに何の差
閊はあるものですか。新娘子の嫌な譯は何ですか』
劉妻は躍起と、なつて侑める。
『いゝね、いゝね、嫌な事は決して無いのであります』

玉郎は慌てゝ返事をしたが、然し是は彼に取つて、困つた事であつた。

『若しあなたが二人で寢むのが嫌であつたら、蒲團を別々にして、寢んだら良いでは無いか』

尙も、執拗く曰つて、今度は慧娘の方を向き、

『さ、汝、早く蒲團を取つてお出で』

と、吩咐けた。慧娘は承知して起つて行つた。

『ね、いゝでせう。慧娘が來たら、早く寢みなさい』

と、云ひ棄てゝ、劉妻も出て行つた。後に取り殘された玉郎は、實に到惑した。

母の涙に送られて、宵月の野を轎に搖られ乍ら、此の家に着いてから、今に至る迄の間は極、暫らくの時間であつたが、何だか過ぎ去つた、夢を憶ひだすやうに、茫然と頭の中に繰返へされた

あの美しい人ならば、假令、一と時でも、共に語る機會があつたら、自分に取つては、此の上も無い幸福であるのに、長い佗しい夢の一夜を、徒然に慰めくれる友としては、勿體なくて涙が溢れる程嬉しい氣がするが、又、秘かに自分は恐ろしい秘密の使命を帶びて、虎穴に入り込んで居る事を思ひ出して、悚と戰慄上つた。

彼はこつおいつゝ思案にかきくれた。

月の宮ゐの驕樂宴
金燭眩き万堂に
不斷の芳香たち迷ふ
只我燭り捉れの
翼慄く烏の如
白雲遠き古鄕の
行方を忍びて歎く時
綠髮すらりと玉櫛の

雪の肌を包みたる
紅緋の被衣を翻へし
華顔は香る帶秀の
花恥かしき乙女子が
そこ魔き莞爾と
溢る靨のあごけなさ
例へば戀の若人が
只奥深く秘め置ける
胸の惱みの夫の如
嗚呼如何にせん唯我は
心の疑惑解きかねて
そゝろに燃ゆる胸のうち

歡樂の夢

一

玉郎の瞑想は遠く天國に昇り、身は唯空蟬の藻抜の空の如く、化石のやうな、五體ゐ唯無意識に支へるのみであつた。心緒は益々亂れて、花に狂ふ胡蝶の如く、夫れから、夫れへと、果しなく、遠く天涯の夢を駈け廻ぐりつゝあつた時、突然彼の脊を優しく搖する人あるのに、ハッと、我に返へると、そは彼の夢想の天女その儘な、慧娘の白い面が嫣然として、滴るやうであつた。

『アッ』

玉郎は靜な瞑想を破られて、又も現實の悶へに立ち返つた。

『嫂々、定めてお腹が減りましたでせう』

『いゝね』

彼は小さい聲で答へた。

『何でも欲しい物は遠慮なく私に仰しやつて下さい』

『有難う』

玉郎は親切な彼の女の言葉に心の中で感謝した。慧娘は燭火台の花を眺めて居たが、

『まあ美しい事、恰度嫂々のやうに美しいわ』

玉郎は顔を赧めて、

『冗談仰しやつちやいけません。あなたこそ、甚那にお麗しい事でせう』

『あらお口がお上手ね』

慧娘は嫣然と笑窪を見せた。

玉郎は腑し眼になつて、殘燈の瞬きを眺めて居た。慧娘は尙も話し掛けて、

『嫂々、私眞正に美しい姉さんが出來て、嬉しいわ。どうか仲良くして下さいね』

『それは御同樣の事です』

玉郎の聲は顫ねてゐた。

『嫂々、御氣分が勝れぬやうでしたら、遠慮なく御寢み下さい、大分夜も更けた樣ですよ』

『妹々、お先に御寢み下さい』

『嫂々、あなたから』

『いゝえ、あなたから』

『嫂々、私は家の者、あなたは御客樣ではありませんんか』

『此の室では妹々こそ、お客樣ではありませんか』

と、玉郎は笑つた。

『いや、嫂々、中々御談しがお上手ね、では一緒に寢みませう』

白玉の樣な肌をチラリと、見せて、天女は羅綾の羽衣を脱ぎ棄てた。そして、そ

の手を彼の肩にそつと掛けて、

『さ、嫂々、寢みませう』

花燭は燦いたが、玉郎の面は不安であつた。

澄み輝ける雙眸子
花恥かしき顏に
溢るゝ愛のほゝゐまば
誰かは優し芳脆の
戀の甘きを覺ゐざる
されごも悲しき運命の
越ゐ易くして越ゐ難き
極秘の鐵扉いと固く
燃る業火の閃も

冷き悶を如何にせん
煩惱の業火を壓ゐんと、すればする程。彼の惱はいや增して、總身の中に打ち震ふ、怪しい悶ゐが血を吐くよりも苦しく蜿蜒打つた。

台に搖ぐ殘燭の
光り輝く瓔珞や
羅帷纖手にそと搖げ
籠る情の匂ひなば
忍ぶこすれご得堪ざる
若き血汐の如何にせん

玉郎の面は益々蒼白に、キツと嚙みしめた。唇は血の氣も失せて、彫塑のやうな彼の身體は唯、椅子が支へる許りであつた。

『さ、嫂々』

慧娘は惜しげもなく、軟かい、ふくよかな、腕をさし延べて、玉郎の手を慥と握つて、引き寄せた。曳かるゝ儘に、玉郎は危く蹌めいて、帷の中に身を埋めた。

『あら嫂々、怎っかしてゐらつしやるのね、定めて新官人が見ないものだから氣を惡くしてゐらつしやるに違ひ無い』

玉郎は打ち震ふその手に上衣を脱いで、默つて、從つた。

二人はそこの軟かい臥床の中に相並んで横たはつた。慧娘は笑つて、

『今宵は私があなたの夫ですよ』

と、戯ひ乍ら、手を差し延べて、輕く彼を引き寄せた。玉郎は始めて笑つて、

『いや、私こそ年上ですから、今宵は夫ですよ』

と、言つたものゝ、斯は云ふ可き事で無いと思つて、思はず首を縮めた。

玉郎の胸は怪しく慄いて、鼓動は益々高鳴り、眼を閉じても、心は遠く天涯の驕樂の宮殿を斯けめぐつた。

『私は兄の代りに拜堂を行つたのですもの、私が當然夫ではありませんか』

と、尙も笑つて、戯ふ慧娘の言葉はも早や、彼の耳へは這入ら無かつた。玉郎は答へる可き適當の言葉を失つて、

『妹々、お幾つになりましたか』

と、話を反らしてしまつた。

『ね、十五才』慧娘は如才なく、早速答へた。

『おや、それでは一つ違ひ』

『あら、そうですか』

『許嫁はどちらに』

『あれ、嫌な嫂々』

慧娘は始めて顏を赧らめて、一寸玉郎の肩を突いたまゝ答へなかつた。玉郎は好奇心に驅られて、尙重ねて尋ねた。慧娘は止むを得ず微な聲で、

『裘九老の息子の處へ行く事に決つて居るのです』
玉郎は何となく、慌しい嫉妬に撚ゐ出した。
『幾日頃、お出でになりますか』
慧娘は聲低く、笑つて曰ふのに、
『近頃再三、輿入れを急いで來ますが、父は家の都合で、暫く、延して居ります』
『まあ、それはお氣の毒、定めて、本意なくお思召でせう』
『まあ嫂々、余り甚いわ、覺ゐてゐらつしやい』
慧娘は軟い手で、強く玉郎の頭を押し出した。
お氣に觸りましたか、ではお免下さい』
『いや、私はちつとも腹は立ちません、それよりも、あなたが怒つてゐらつしやるに違ひない』
『いや、決して、そんな事は有りません』

二人の物語りは暫く斷へて、夜の靜寂は葬と感じた。月は中空に皎々と、澄み昇つて、夜は次第に更け渡つた。
『もう遲いから寢よふではありませんか』
と、慧娘は思ひ出したやうに曰つた。
『ゐ、寢みませう』
慧娘は無遠慮に、ぴたりと寄り添つて、片手を輕く玉郎の身體にかけた。
『さ寢みませう』
美しく耀いて居た。眸子は俄に閉じた

二

纖美の白玉の面、窈窕の黛は天使の崇美を偲ばしめ、唯一抹の睫の細い一條は、蕩然として陽炎の春の夢を追ふかのやうに、然も、その燃る丹花の唇は、微かに綻

び、恍惚として只精靈の囁きを漏らすがやうであつた。玉郎は心飛び、魂消ねて、恰も、神秘の絃に觸れたかの樣に唯渾然と迷ひ入る許りであつた。

紈のやうな軟かい肉體からは微かな温味が脈々の芳薫と、泌々の情思とが、彼の五體に犇と絡んだ。

道の玉郎も、今は遣る瀬無い胸の惱みに、五濁、煩惱の炬火と燃ね上つて、火を吐くやうな其の唇を只嫋々の花の豐頰へそつと、觸れた。爛熟の花の香りは熾烈な狂熱と共に、彼を翻つて、簾珠、紅閨の春の夢かと許り、恍惚として、その全身が痺れた。彼は只蕩然として、直ち嬌羞の五體を搔き抱くのみであつた。

慧娘は、嫂々が獨り寢の佗しさに、業を煮やしての戯れと思つて、態と彼の欲するまゝに、何事も眼を瞑むつて、忍んで居た。

玉郎、今は灼熱の焰であつた。現ゆる萬象を燒き盡さではをかぬ、熾烈の火であつた。爛々として怪しく耀いた、その眼には、小鳥のやうな慧娘の、芳脆溶ける許りの五體を、心地良げに睨んだ。

此の美しい生贄が、今や恐しい鵰の前に、身動きならぬ羈絆に捉れの身で有る事を知るや、知らずや。

慧娘の胸は露はに寢亂れて、嬌美の泉のやうに、澄み切つた肌を、更に引き緊め瑪瑙の小山の樣な、軟かい隆起の下に、慄き震ふ早鐘の響を聞き貧つた。

狂亂の焰
灼熱の渦
渾然として芳醇の
只一個の肉體を廻つて
烈々炬火の旋風
奔放止るなく
狂騰靜るなし

嬌羞の旋律に咽び
纎美の脈動に顫ふ
生を超越し
靈を超越して
只恍惚の境地あるのみ

慧娘は玉郎の壓迫に蒸せ返るやうな思ひを堪ねて居たが、今は堪りかねて、

『あゝ、』

と、思はず、微かに息を吐いた。

玉郎は慧娘の呻きに驚いて、一寸、我に返つたが、滑かな琉璃のやうな肌を未だ棄てる譯には行かなかつた。

慧娘も、燃るやうな嫂々の五體の暖かさに、絡まれて、春酣なその血汐が脈々と躍動するを覺ねて、異樣な昂奮が彼の總身に浪立つた。彼の女は蕩乎として、快よ

い泌情に咽び乍ら、露に亂れたその姿態は、一層しどけ無く、取り亂した。そして慄く、纎手を思はず、玉郎の懐に插入れて、灼熱溶けつゝある、其の肉體から、燃ね上る許りの快き疼きを覺ねた。

彼の女は只夢心地に、その手を玉郎の〇〇へ滑らした一刹那、愕然として、色を失つた。

彼の女は、はぢかれたやうに、颯と身を翻して、立ち上つた。そして、骨の慄まで、氷つく程の恐しさを耐ねて、顫々と慄ね上つた。そして蒼白な血の氣の失せた顔を玉郎に向けて、キツトと睨みながら、

『嫂々、汝は何者ですか』

『……』

玉郎も亦、愕然と色を失つた。

『あなたは何故、嫂々に化けて來ましたか、お返事次第で、私は聲を揚げますよ』

慧娘の顫ひは未だ止まなかつた。

歡樂の夢は忽醒めて、恐しい嵐が渦まいた。二人がしばしの緘默の裏には慌しい風雲の急が刻一刻と、詰め寄せた。

玉郎、今は觀念の目を閉じて、その前途に横る總ての崩壞を覺悟した。彼が理性に甦つた時は、既に遲かつた。彼の重き使命、――恐る可き假裝の曝露、――母親の困惑、――劉家の激怒、――夫れから、夫れへと、思を廻らした時、始めて我身の不覺を痛感して、身も世もあらぬ悲しさに、聲を揚げて潸々と泣き入つた。

三

慧娘は泣き沈む玉郎の樣子を瞬もせず、見つめて居たが、不覺の涙に暮れた、その樣子の余りの慘らしさに、斯は何か深い仔細のある事と思つて、稍怒を和げ、

『あなた一體怎うしたのですか、秘さず、話して下さい』

と、幾らか、落ち附いて尋ねた。玉郎は今は詮方なく、涙に咽び乍ら、秘密の始終を物語つてしまつた。

『も早や、私は生きて居る事が出來ません、どうか、總ての罪をお許し下さい。死んで、御詫びを致します』

と、決心を定めて、室を飛び出さうとした。其の袖を慥と捉へて、慧娘は、

『お待ち下さい。早まつてはなりません』

『いや、どうか放して下さい。私はも早や、世間への顏向けがなりません』

『まあ、お待ち下さい』

『いゝえ、どうか放して下さい。お願です』

と、玉郎は兩掌を合した。

『此の事は未だ世間の知つた事ではありません。唯、あなたと私との間の事ではありませんか』

『え、え』

『私はあなたの爲に固く秘密を守ります』

『……』

玉郎は只嬉しい涙に搔き暮れた。慧娘は又、從容として彼に言つた。

『今宵の式は洵にあなたと、私との眞正の結婚式でありました』

『ねね、ね、何と被仰います』

『あなたさへ、お見棄て下さいませなんだら、私は永久にお側を離れません』

『そ、それでは裴九老の……』

『私は二夫に見之ません。あなたの外に夫はありません』

『ね、ねッ、……』

玉郎は夢かと許り驚いて、茫然として、呆氣に取られて居たが、慧娘の儼として犯す可らざる、雄々しい決心の色を見て、感極つて、又潸々泣き伏した。

『私は感謝いたします。私は感謝いします』

と、歡喜に躍る胸を抑へ抑ら、慧娘の足下へ、幾度も頭を摺り附けた。慧娘は莞爾として玉郎の手を取つた。

『さ、寢みませう。遲くなりました』

玉郎は夢に夢見る心地して、再び、臥床に横つた。

燃る情思に紅の
情は深き胸と胸
包むに余る嬉しさは
五體の血汐狂はして
犇と抱きぬ鴛と鴦。

慧娘は蕩ける樣な艶娟を含んで、彼に仕へた。恰も胡蝶の花に狂ふが如く、鴛鴦の水に戯れるが樣に——。

一枕鳳鸞聲細々、　半窓花月影重々、
曉來起視鴛鴦被、　無數飛紅點綉戎。

隣室に臥して居た、養娘は二人の間違の無い事を祈つては居たが、心に掛つて、中々、睡れ無かつた。彼は幾度か、轉々として、寢がへりつゝ、惱ましい長夜の一刻も早く、明け渡らん事をのみ、欲して、焦つた。

折しも、唯ならぬ物音と、聲高き二人の爭に、ハッと、驚いて、つと頭を擡げ、息を殺した。兩人の爭は手に取るやうに聞えたので、氣が氣で無く、扨ては案の如く、大官人の淺ましい振舞か、情無くもあり、腹立しくもあつた。扉を開けて這入らうとしても、固く閉じて開かなかつた。今にも大聲が揚りはしまいか、飛び出して來はしまいか、と、はら〳〵、氣を柔み乍ら立つたり、坐つたりして居たが、案外平穩につて、又語り合ふ言葉が洩れた。養娘は尙も注意を忘らず、頭を擡げて居た。

深夜兩人喜事從、　芙蓉帳暖語從容、
貼胸股交情偏妍、　撥雨捺雲興轉濃。

養娘は有られも無い二人の始終を聞き知つて、二度吃驚りに、腰も拔けん許りであつた。

四

曉告げる雞の聲に夜の帷は明けられた。薄紅の一抹は、東の山頂を染めはじめた歡樂の一夜に惜しき別れを告げて、玉郎は起き上つた。慧娘も疲れた身を起して、

母の許へと去つて行つた。

養娘は玉郎の髪を梳りながら、過ぎし夜の樣子を物語つて、その不謹愼を責めた

『私も間違つた行をする心は夢更、無かつたのであつたが、木石で無いての身が美しい乙女の情を怎うして耐ぶ事が出來ませうや。全く私は濟ぬ事をしましたが、此の事は小娘さへ、人に語つて呉れ無かつたら、誰も知らう筈は無い』

と、云つて、化粧を濟して、劉妻の室へ挨拶に行つた。二人の挨拶は濟んだ時、劉妻は玉郎の耳を見て、

『あら、汝は耳飾を怎うしたのだね』

玉郎は「ギクリ」としたが、さあらぬ體にて、

『是は出來ものが出來たので、外して居ります』

と、答へたので、劉妻は深く氣にも止めなかつた。

玉郎は新房間へ又歸つて來て、坐ぢつ居た。本日は早朝から親戚の女人達が多勢

で、新娘子を祝傍々、挨拶に來た、張六嫂も亦、來た。婁娘も亂れた髪を美しく結ひ直して來た。二人は互に「チラリ」と見合つて、莞爾とした。

此の日、劉公は又、多くの人々に馳走を出して、日ねもす、鼓樂の聲が何を祝つてか、いと賑かであつた。夜は兩羽の鴛鴦が誰憚らぬ愛の臥床の睦言を丈け長々と語り明かして、顚鸞倒鳳の情思を交した。

衾翻紅浪效綢繆、　乍抱郎腰分外羞、
月正圓時花正放、　雲初散處雨初收。

泣春の譜

一

斯うして、幾夜の歡樂に醉ひ癡れて、玉郎は身も、家も、忘れ果て、一向歸らうとも、しなかつた。養娘は心配して、度々彼を促したが、空吹く風と、聞き流していつかな歸らうとも云はなかつた。養娘も詮方無いので、自分獨り、祕かに立ち歸つて、孫寡婦に、有りし次第の一部始終を具さに語つた。孫寡婦は之を聞いて、驚くこと一方で無く、切齒して、悔しがつた。

『怎うして、斯んな事を仕出かして呉れたか』

彼は氣も狂はん許りに激昂して、

『汝も、汝だ。そんな間違があつてはならぬから、附けて遣つたのでは無いか。何故注意をして呉れなんだ』

彼は養娘にも叱り附けて、早速張六嫂を呼ばしめた。

孫寡婦は張六嫂に問つて、

『約束の三日も既に過ぎたのですから、一度、娘を還にして貰ひませう』

と、氣色ばんで、迫つた。張六嫂も、兼ての約束もある事故、一期に及ばず、うべなつて、養娘と共に、又、劉家へ行つた。そして、孫寡婦からの賴みを傳へて、新娘子を一時、還してやつて呉れるやう賴んだ。

玉郎は勿論、心の中で歸る事を欲せなんだから、劉妻が之を拒んで呉れゝばよいが、と、思つて居た。劉妻は之を聞くなり。張六嫂に向つて、

『汝も子供では有るまいし、是れ位の道理が解りませんか。何處の家でも、一度嫁いた以上は、その家が我が家なのです。どこへ歸る家があるのですか。假令、汝が怎んな約束をしたにしても、此の私は世間の法を曲げる譯には行きません。

又、祝の騷ぎの終るか、終らぬ時によくも、そんな事を云はれたものだ。そんなに心配になるのなら、始めから、遣さなかつたら良いではないか』

と、劍もなろほいゝの挨拶で、拒絶してしまつた。張六嫂も、養娘も、今は取り附く、島も無く、悄々として引き取つた。養娘も立ち歸つて、此の話を告げ度いのだが、高潮に達した、兩人の仲が何時、他人に知れんとも限らない危險があるので、一寸の間も眼を離す事は危いと思はれたので、又、止つて、詮方なく、二人の張り番となつてゐた。それで、劉妻からの返事は張六嫂に賴んで、寡婦に傳へて貰ふやうにして置いた。處が、張六嫂も、自分の以前にした約束もある事故、今更となつて、面目なさに、此の始末を孫家へ行つて、傳ゐる勇氣が出なかつたので、遂に、その儘と、してしまつた。

二

劉璞は其の後、漸次病が快方に赴いた。病中に來た、我が妻が非常に眉目秀れて美しいと云ふ事を聞いて、心中大層喜んで、一日も早く、病が快くなつて、逢つて

物語りして見たいと思つて居た。道の病も、益々薄らいで、も早、頭さへ、上るやうに成つたので、兩親の喜びは一と通りでは無かつた。

或る暖い日の午後であつた。彼は近頃に無い心地の勝れた思ひがしたので、髪を綺麗に取り上げさし、顔も久方ぶりで、美しく洗つて、始めて人心地がしたので、この機に、新房間へ行つて、未だ見ずに焦れて居る、我が妻に逢つて見度いと、思ふと、矢も楯もたまらず、母に賴んだ。劉妻は病上りの身を氣遣つて、召使に手を取らしめ、自分も、その後に、從つて、緩りと新房間へ歩を運んだ。新房間の入口には例の通り、忠實な養娘が居たので、召使は腰を踞めて、

『一寸、御免下さい、大官人が御いでになりましたから、御通しを願ます』

と、會釋した。

養娘は態と大聲で、

『あら、珍しい事。大官人の御入來ですか』

と、會釋を返へし乍ら、呶鳴つた。

恰度、折も折、玉郎は慧娘を自分の膝に抱き上げて、戯れて居る所であつた。互に、胸も露はに、かき亂して、女の漆黒の綠髪を我が腕に、その妖嬌の眸から溢れる婉容に身も心も、蕩け盡して居た。慧娘も、嬢娜なその身に、滿腔の嬌媚を捧げて、嫽然としてゐた。

過ぎ行く春の悲しみに
花散る風の咽ぶごき
茲には戀の亭樂に
唯青春の歡喜あり
花欄干に吹雪時
死なば狂へる戀に死なん
青春君と我のみぞ

君が情の閃きも
こけて優して黒髪に
もつれて狂ふ鴛の
只歡樂の春なれや

養娘の一聲は鋭く、二人の耳底に轟いた。實に、凄い、嵐であつた。二人の狼狽は其極に達して、解けた紐さへ結ぶに、暇無く、只纔に、玉郎の膝から滑り下りた刹那に、一同は這入つて來た。取り亂した、此の場の有樣を訝られ無いやうにと、祈り乍らも、互に、面は赧く、上氣して居た。

『何だね、眞晝に扉なんか締めてさ』

と、劉妻は一寸、言葉に劍があつたが、何氣無い態に見ゐたので、兩人は祕に胸を撫で下ろした。玉郎は手を支いて、大官人を迎ゐた、劉璞は輕く會釋を返へし乍ら、凝つと、我が妻を眺め入つた。

薄紅に上氣した、姚冶な、その姿、やゝに亂れた、その姿態は反つて、嬌艶の嬾々たるものあつて。劉璞をして吸ひ附けられる樣な魅力に醉はしめた。そして、彼は心中に溢るゝ程の幸福に欣喜して、胸はときめいた。慧娘は如才なく、

『兄さん、もうそんなに癒しいのですか』

『もう、余程快くなつたから、一寸出て來た、又速に歸つて寢るよ』

『今日はよいお天氣で、暖ですから、暫く、遊んでゐらつしても、良いではありませんか』

『いやノ、、病中だから、油斷は出來ないよ、もつと、養生せなければならない早く歸ることだ』

母の言葉に、詮方なく、劉璞は後ろ髪を曳かるゝ思ひで、新房間を出て行つた。其の後姿を見送つて、兩人は互に顔を見合して、吻とした。玉郎は始めて、劉璞の起き上つた姿を見たが心の中では、病中とは言ひ乍ら、眉目清秀の容姿と、優しみ

の溢れた、その温容と、には忘れ難い魅力を感じて、自分の姉の夫と、しては、申分の無い立派な相手であると、思つた。然し、あの様に快癒に近づいたのを見ては自分等の立場の危く成つて行く事を今更感じて、深い思案にかきくれた。

三

兩人は喃々と、語り乍ら夜に入つた。

『私の歸らねばならぬ事は身を切られるよりも、辛いのですが……』

『でも、あなたの御歸りなさる事は、いと、お易い事でせう。私こそ、どうして良いやら、全く到惑してしまひます』

『私は假令、一と時でも、あなたから離れる事は壓ね難い苦痛でありますが、然し、事情止むを得ぬ次第ではありませんか』

『でも、でも、それは……』

『然し、我々は最後を飾らねばなりますまい。御約束の通り、永久、連理の床に入らねばなりません。して見ると、只一時の苦痛はお互に、忍ぶ事は勿論、將來の目的の爲にはどんな犧牲をも、拂はなければなりません。目前の小事に拘つて居ては遂に取り返しのならぬ破滅となりはしますまいか』

彼は諄々として、その一句々に、力を入れて諭した。然し、慧娘は泣き入る許りであつた。

『嫌です。嫌です。あなたは口先き許りの事を被仰つて、欺まさうと、なさるに違無い』

『わわつ、何と、誰か欺すものですか。今も云つた通り、目の前の小事に拘つては、お互に、破滅です』

『……』

『一時の淋しさを忍んで、他日の春を待つのです。美しい春の花咲く前には蕭條

の冬枯れが無くてはなりません』

『でも、あなたと逢ねなくなるのなら、私、生きてゐないのも同じですわ』

『さ、さ、そこが、一時の辛抱なのです』

『でも、私はどうあつても、別れるのは嫌です』

慧娘は身を搖つて泣く許りであつた。

木の葉を搖る風の音は鳴り止んで、雨と變つた。窓外、細雨霏〻として、瀟々の響をたて〻無慘や緋牡丹の蕾も、雨に、風に、虐げられて、朽ちや果てぬかと、心を痛められた。

彼の腕に、より縋つた慧娘は打ち顔ね乍ら欷り泣いた。その熱い涙は玉郎の胸に溢れかゝつて、過ぎし歡樂の幾夜の夢も、茲に慌しく、碎かれて、その恨みと、悶ねに、やる瀬無い胸を破れよと許り、吐く息の慘らしさに、玉郎も慰める言葉も無く、彼自身も又、現實の悲哀を今更犇と身に泌みて、共に闇涙に咽び入つた。

外には蕭々、霏雨の怨び音、洩れ聞こね、內には逝く春の追憶の恨に紅涙を止めかねた。

『玉郎樣、私はどうあつても、あなたを手離す事は出來ませぬ』

思餘つて、慧娘は繰り返した。

『それでは、何事も破滅となつてしまつては……』

『それも厭ひませぬ。あなたの御腕に恁うして、凭れ乍ら、死んでも夢更ら恨とは思ひませぬ』

『夫れは、未だ行末、長い春を、自ら棄てやうと、云ふ無謀なお言葉です』

『いね、いね、私はどんなに被迫つても、此處、一寸も、あなたを離しません』

『おゝ、是非も無い。慧娘どの』

玉郎は、余りに咽び入る慧娘の春を優しく、撫でて、止むなく慰めねばならなかつた。

玉郎の決心も　恁うした、その一角から、稍に崩れて、日一日と、荏苒するのみ
となつた。

旋風

一

劉妻は新娘子が來て以來、慧娘の素振りの何こなく、變つて見ゐるのが氣になり出した。そして、夜こ無く、晝こ無く、離れる間無しに、閉じ籠つて居るのも、不審の一つであつた。然し、新娘子が獨り寢の、淋しさから、多少の不平も有らうこ思つて、强て、何事も云ひ出さず控ゐ目にはして居つた。

或る日、劉妻は新房間の前を通り合すこ、今日も扉が閉されてあつた。いつも居る筈の養娘が、用足しに出たのか、姿が見ゐ無かつたのを幸に、一寸、隙間から覗いて見た。

劉妻の覗いて居るこは神ならぬ身の知る由もなく、兩人は亂次ない有樣で相擁して、潛々こ歎いて居る樣子の、只事で無い事を知つたので、尙も、能く見るこ、帶紐さへも、うち解けてあられも無い淺ましい姿の我が娘を見たので、彼は赫こ、怒

つて、矢庭に、扉を押したが、慥と閉じてあつて、開かない。益々驚いた彼は大聲に喚いて、

『門を開けろ』「門を開けろ』

と、連呼した、室内の兩人の驚きは譬へるに物なく、けに晴天の霹靂と許り、うち驚いて、狽ねまくつたが、致し方無く門を開けた。

劉妻は滿面朱を注いで、身を繕ふ間もあらせず、取り亂して、狽ねた、兩名をハッタと、睨み上げ、聲を勵して、叱咤した。

『其の狀は何事か、晝の日中に扉を閉じるさへ、不屆であるのに、その眞似は何事だ。何が悲しくて、兩人とも歎くのだ。碌でも無い』

『御免下さい』

兩人はさし俯むいて、詫び入るのみであつた。

『お前達は恥を知つて居るのか』

劉妻は慧娘の襟に手をかけて、

『さ、何が悲しいか。その譯を聞かう』

『……』

『さ、早く云はぬか、云はなければ斯うだ』

彼は慧娘の髪を掴んで、引摺つて行つた。そして、有合ふ手頃の棒を振り上げて亂打した。慧娘も、堪ね切れぬ、手嚴しい强問に、今は包み切れず、有りし次第を逐一、物語つてしまつた。

劉妻は事の意外に度膽を拔かれて、暫くは手も足も、顫はして、呆然として居たが、見る〳〵恐しい形相と變じて、柳眉を逆立て、齒を嚙み鳴らして、怒氣、心頭に發し、握りしめて居たその棒を夢中に振り上げて、又も、滅多打ちに、打ち据ゑた。纖い慧娘の五體は肉も裂け、血も迸れよと許り打ち續けられたので、今は氣も遠くなつて、微かな呻きを漏したまゝ、打ち倒れてしまつた。

召使ごもは此の物音に驚き、駈け付けて、棍棒を劉妻の手から奪ひ取つて、彗娘を介抱した。然し、劉妻は尙も烈しく狂ひ乍ら、

『已れ、孫寡婦の畜生、能くも人を邁迦にしやがつた、事もあらうに、男を女に仕立てゝ、此の劉家を蹈み倒すさは、太い尼だ』

惡鬼、罷刹の荒れ狂ふが如く、血走つた眼で、新房間を睨み上げ、

『奴、怎うするか見よ』

喚き乍ら、失庭に物凄い古る刀を引き出して、駈け出した。召使ごもゝ、余りの恐しさに、どうして能いか、只狼狽する許りで、劉妻を引き止めやうと、する者は一人も無い。重傷に惱みつゝあつた、慧娘はこの體を見て、斯は玉郎の身の一大事と見て取つて、跟めき乍らも、必死となつて、母に追ひ縋つた。

二

新房間では、外出して居た、養娘が戻つて來て、此の場の出來事を聞き知り、驚く事一方ならず、扨は大事の露見か、是は怎うして、居られないと、氣を柔み乍ら悄然と思案にくれる玉郎を勵して、

『怎うしては居られませんよ、一刻も早く、お遁げなさい。亦どんな騒動が起るかも知れませんよ。早く、早く、早く』

と、焦き立てるので、玉郎も詮方無く、後髪を曳かれる思ひではあるが、今の場合としては養娘の言ふ通り、一刻も早く逃げるより外は無いと思つた。早速皮箱を押開いて、例の底類を引き出さうと、する刹那、大聲に騒ぐ人聲が耳に這入つたので、二人はハッと、胸を轟して、申合せたやうに悸りとした。それは、間違も無く怒り罵る劉妻の聲であつた。

養娘は、斯はたまらんと、思つて、

『さ、早く、早く』

と、玉郎をを促したまゝ、自分は逸早く飛び出したが、憤怒の形相、凄じく、火を吐くかとも見ゐる劉妻にバッタリと、出喰した。養娘は腰も抜ける程、打ち驚いて、ピタリと、そこに膝を突いた。

『此の畜生め』

と、世にも恐しい、金切聲で、喚き乍ら、養娘の頭を丁と、蹴上げ、匿くし持つた刀を振りかぶつた。乳母は此の體を見て、キャッと、叫んで、四つ這ひになつて懸命に足掻き遁れた。

劉妻は逃げる養娘には、眼もくれず、新房間へ飛び込んだ。

玉郎は、養娘が室を飛び出すや否や、キャッと、玉消る、唯ならぬ聲を聞いて、唯事で無いある恐るべき予感に犇と胸を打たれたので、咳嗟に、臥床の下に潜り込

んだ。勿論、狼狽したので、履物は脱げて、散亂し、皮箱は蓋を開けた儘であつた。

室内に飛び込んで、キッと、あたりを睨め廻した、劉妻の眼には、玉郎の姿が見ゐなんだ。履物は脱いであるし、皮箱の中の物は持出してある。

『あゝつ、仕舞つた』

風を喰つて逃げたに違無いと思つたので、口惜しさうに、地駄々蹈んで、身悶ゐたが、未だ遠くは行くまいと思つたので、表の方へ急ぎ引き返した。

玉郎は臥床の下から、此の有様を見て、生きた心地も無く、唯顫々と、慄ゐ上るのみであつたが、劉妻の見ゐなくなつたので、今ぞと、徐つと首を出さうとする瞬間、又も慌しく、飛び込んで來た女人があつた。

玉郎は、悸つとして、咳嗟に頭を窄めた。女は其處にバッタリと倒れて、呟んと、呻いた。能く見れば、それは別人でない慧娘であつた。母の後を追ひ縋つて、駈けて來たが、身に負ふた、痛傷と、疲勞に、ゐ耐ゐずして、うち倒れたのであつ

たゝ

玉郎は此の體を見て、二度吃驚して、膽をつぶした。

『お、慧娘』

と、叫んで抱き起した。慧娘は驚いて、無事に居てくれた、玉郎の姿を不思議さうに眺めて嬉し涙に吳れ乍ら、苦しい聲を搾つて、

『は、早く遁げて下さい。此處に居ては、あなたの、命が……』

と、云つた儘、又苦しさにグッタリと、なつた。玉郎は益々狼狽して、慧娘を憮り助け乍ら、

『怎うしたのですか。確りして下さい』

と、勵した。慧娘は又、苦しい息の下から、

『私に、構つて居てはなりません。は、早く、に、遁げて下さい。は、は、早く……』

喘ぎ乍らも、苦しい聲で焦き立てた。

玉郎は怎うして、慧娘を見捨てゝ、行かれやらか。然し、愚圖〳〵して居ては、彼の危急の瀬戸端と、なるのである。彼は全く進退谷まつた。慧娘は尙も、彼を促して、やまなかつたが、玉郎は未だ立ち迷つてゐた。

突如として、劉妻がヌッと、現れた。愕然と、色を失ふ、玉郎を睨み上げ、怒髪は天を撞き、齒を喰ひ縛つた形相は此の世の人とも見ゑなかつた。

『奴、畜生、此處に居たか、此の場になつて、末だ娘の肉を舐らうとは、いけ圖々しい獸物だ』

嚇と、逆上せて、矢庭に、玉郎にハッシと、斬り附けた。玉郎は素早く、身を飜したが、足を滑らして、その場に撞と、倒れた。恰も良しと、劉妻は馬乘りと、なつて、怨み骨隨に、徹する惡魔を唯一と突きと、振り被つた。その鋭い尖先きは、風前の燈火に等しい玉郎の目の前に、閃りと、閃めいた。

此の間一髪、半死の體であつた慧娘は、ガバと刎ね起きて、奮然と、母の二の腕に我を忘れて、縋り附いた。

『己れ、未だ懲りもせずに、邪魔をするか』

劉妻の怒りは、薪に油を注いだやう、烈々として、渦卷いた。懸命の力で、慧娘を振り飛ばして、尙も、玉郎に飛び蒐つたが、玉郎は慧娘の救助によつて、危い急場を遁れる事が出來た。彼は恐しい、刄の下を、彼方、此方、と、潛り乍ら、防いで居たが、軈て、兩掌を合して、慧娘を伏し拜んで、脫兎のやうに、身を躍らして、飛び出した。外へ出れば、女子の纏足は、到底、男子の素早さには、及ばない。

劉妻は必死となつて、追ひ迫つたが、彼は雲を霞と、逃げ去つた。

折破玉龍飛彩鳳、　頡開金銷走蛟龍。

劉妻は、無念遣る方無く、

『口惜しい』

と、一語を殘して、其處に、撞と倒れた。人々は驚き駭け附けて、漸く介抱した。

三

龍卷の如き旋風は一過して、夕日は默々として、西山に沈んで行つた。眞紅の落暉は漸く、暮靄の中に、搔き消されて、晩鐘の戰きは、哀しみの弔音を捧げるやう、微かに顫ひた。

慧娘と、劉妻とは、病床に身悶乍ら、人々からの看護を受ける身とはなつた。

劉秉義は、漸く其日の診察を終へて、我家に歸つて、此有樣に、驚き乍ら、召使を呼んで、仔細を聽いた。始終を耳にして、劉公は驚天した。慌てゝ、妻の枕頭に行つて、

『斯んな、出來事の起る原因は皆、汝、自身が作つたのだぞ』

『……』

『俺が始めに、式を延ばすと、言へば、汝が反對して、無理に取り定めたのだ』

『……』

『新娘子を獨り新房間に、寢ましめよと、言つた時、やはり、汝が反對したのでは無いか。誰を恨んで、狂ひ廻つたのだ。大切の娘を何故、こんなに、酷く、打つたか』

『……』

劉妻は默々として、眼を閉じた儘、一言も發しなかつた。劉公は尙も鋭く、

『汝、自身の重い罪を怎うして、償ふのだ、罪もない娘を手痛く折檻する手で、汝自身をなぜ打たなかつた』

遺の劉妻も、始めは恐縮して居たが、又も取り逆上せたか、嚇と憤つた。

『此の耄碌め、妾の知つた事かい。何處の世界に、嫁轎の中から、睪丸下げた野郎が飛び出すと、思ふ奴があるかい。何が妾の罪なものか。あの此處な戯けめ』

と、口汚く、罵り返した。劉公、聞くなり、怒り心頭に發して、劉妻の頭髪を、ムヅと、ひつ掴んで、引摺り下した。劉妻も負けては居らず、自分の頭を、夫の胸に强か、打ち附けて、掴み蒐つた。劉公も、螺のやうな、拳固を固めて、强か、喰した。

怎うして、敦方も負けず、劣らず、犇き合つて、又茲に修羅の荒れ狂ふ場面とはなつた。慧娘は重態を忘れて、又、父と母との間に分け入つて泣いた。

怎うして、傷いた三人は、巴の如くに亂れ始めた。

四

嗚呼、何と云ふ惡日であらう。晝の騷動の漸く治まつたと、思ふ間も無く、怎う

して、又、骨肉相打つて、爭ふことは。

今度は、劉璞の室近くであつたので、彼は吃驚して、飛び出して來た。そして、三人の仲へ這入つた。一同は病余の人に氣を配つて、漸く、爭を止めた。

劉璞は種々慧娘に、譯を尋ねた。又我が妻の姿の見ねないのに不審を抱いた。慧娘は泣く許りで、一向何ごも、答ねなかつた。そこで致方なく、劉妻は委細を語つて聞かせた。劉璞は、且つ驚き、且つ呆れて、色を變じて、茫然としたが、嚬て云ふのに、

『斯那、出來事は洵に家の恥ですから、世間へ内處にするのが第一の事だ、若し世間へ、知れでもしたら、我々は面を上げて、歩く譯には行かなくなりますよ』

『そうだ。もう出來た事は今更、取り返しか着か無い、伜の言ふ通り、是非、内處にして置かなければなるまい。慧娘も許嫁の定まつて居る、大切の身體だからね』

ごと、劉公も穩に言つた。

『洵に、馬鹿〳〵しい事だよ。恁那事が世間へ知れて、堪るものですか』

ごと、劉妻も稍、氣嫌を直して、言葉を合せた。唯獨り、慧娘だけは違つた考を持つて、身悶ねた。

『お父さん。私は裴家へ參る事は出來ません』

『ねゝ、そりや又、怎うしてだね』

劉妻は眼の色を變ねて、詰め寄つた。劉公は靜に妻を押し止めて、

『慧娘よ。汝は何故、裴家へ行く事が出來ないのだ』

『私は、二人の夫に仕ねる譯には參りません』

『二人の夫とは、そりや何の事だ。お前は裴家の外に夫があるのか。自分が勝手に、剛れ合つた野郎を夫だと、思つて居るのか』

劉妻は又、嚇ごなつて、呶鳴り付けた。劉公は又、靜に之を制して、

『二人の夫と云つた處で、皆が秘密にして置けば、玉郎ごの出來事は知れつこは

無いよ。何もそんな者に、拘る必要は無い』

『人は知ら無くても、天が知つて居ります、又、私の心が知つて居ります。私は私の心を欺き、天を僞る事は出來ません』

慧娘は凜呼として、云ひ放つた。

『己れ、此の馬鹿が』

と、息卷く妻を押へ乍ら、劉公は、

『其れは、汝の云ふ事は唯一つの理屈であつて、世間へは通用せぬ事だ。裴九老も、お前の爲には、大金を費して居るでは無いか。茲でお前が、彼れ是れと云ひ出して、それが先方へ知れでもすれば大變だ。こても、斯那事では濟まないのだ。お前も家の名譽を考へなくてはなるまい、唯自分の氣儘を通すだけでは、不孝者の謗りを免れないぞ』

劉公は諄々として、諭き聞かせた。慧娘は只思煩つて、涙を絞る許りであつた。

『怎ふだ、父上の仰しやる事が能く解つたらう』

と、劉璞も優しく、口を添へた。

『いゝね。折角のお言葉ではありますが、私は玉郎の處へ遣つて貰へ無かつたら、もう死ぬより外はありません』

慧娘は牢として、拔く可らざる決心の臍を明に言ひ放つて、泰然と、何物をも恐れぬ、其の態度は天晴れ氣なげに見ねた。遺の兩親も呆れて、顏を見合す許りで、默つてしまつた。劉璞も默つて涙に暮れた。慧娘も亦、新しい泪を誘つて、潸然と突伏した。

濕やかな夜は靜かに更けて、涙に搖ぐ燈火は、惱み多い受難の人々を照して、窓外の月は暗雲の中に、其の嫦娥の光を隱した。

希望空しく戀破れ
片破月の怪雲に

呑まるゝ空の夜鳴鳥
己が運命を咽ぶ如
空しく惱む胸の中
いたで癒さんよすがなき。

其の夜の月が暗雲に低迷した時、慧娘はソッと、寢床を抜け出した。そして、惱み多い身をいづこさも無く、暗に搔き消してしまつた。

邂　近

一

孫家では張六嫂と、養娘が出て行つてから、二日經つても、三日經つても一向に音沙汰が無い。寡婦の心痛は實に一と通りで無く、遺の珠姨も母を慰めかねて、持て餘した。二人は只管、無事に戻つて呉れる事をのみ、朝夕、神に祈り乍ら、暮して居た。所が突如として、養娘は蒼白になつて、歸つて來た。寡婦は養娘の顏色によつて、唯ならぬ出來事のあつた、予感を先づ感じた。そして、顫く胸を凝つと堪へて

『怎うしたのだ。何がそんなに慌てるのか』

『……』

養娘は唯、うち頷ふのみで、頓に言葉も、得出さない。

『水を。水を一杯……』

と、哀れな聲で乞ふた。珠姨は早速、一杯の水を注いでやつた。養娘は漸く咽喉

を濕してから、未だ慄ゐ乍ら、在りし次第の一條を殘らず、聞かした。寡婦は愕然として、色を失つた。そして、慌てゝ、

『玉郎は怎うしたか』

養娘は顫ゐる聲で、

『洵に申譯けない次第ですが、劉妻に促へられたか、劉家を遁れたか、そこの程は私に解りません』

と、面目なげに、泣き伏した。

『エ、エッ、玉郎が促ゐられたつ』

寡婦と、珠姨とは期せずして、色を失つた。

『そ、そんなら怎うしやう、怎うしやう』

寡婦はオロ〳〵聲で、慌てるのみであつた。

『ゐゝ、末だその事はどちらやら慥と判りません。たゞ私の考ゐだけの事であります』

『あれも、男だから、そうメソ〳〵と、して居ないでせう。その内に歸つて來るでせう』

珠姨は母を慰め乍ら言つた。

『先づ取りあへず人を賴んで、秘に索つて貰ふより、仕方が無いだらう』

と、母は言つた。

そこで、孫寡婦は人を賴んで、劉家の樣子を窺つて貰つた。人は歸つて、

『劉家は何事も無く靜まつて居ります。人の話によると、花嫁はどこかへ逃げたこの事であります』

孫家では幾らか、安心したものゝ、末だ氣がかりになつてならんので、種々と鳩首、協議に夜を徹した。劉家からも、何の音沙汰も無いので、玉郎の消息は査こして、知る事もなかつた。

二

劉家を遁れた玉郎は虎口を遁れた思ひで、ほつと、一と息したものゝ、扨て、我家に歸つては、母に合す顔の無い面目無さと、苛責の鞭に我れと我が身を打たれて今はいづこへ歸る可き家もなく、唯、踉々さすらひ乍ら、目的も無く彷徨つた。

夕をいざよふ雲の袖、茜の色も稍に解けて、薄暮の哀觀が弗と身に迫つた。膏の樣に淀んだ湖の水は縹渺として、いつしか脚下に擴がり、名殘の色染めて、將に消ゐて行く今わの彩に映ゐた。恰も彼が半世の悲運の夢を吁くやうな思がする。行く雲の哀れに似た、果敢ない身は唯暮雲と共に、悲愁の色に身悶へ乍ら、冷い夜の氣が弗々と迫つて來る中に佇んで、唯幽明の境を行きつ戻りつして、その魂を一層惱ましめるのみであつた。纏綿として、うらぶれの遊子が月に泣く如く、彼は母を慕ひ、姉を想ひ、慧娘を想つて、斷腸の涙に搔きくれた。思愛の絆も總て、今茲に斷

ち切つて、只獨り黄泉の月を眺め行く身の淋しさを熟々考へると、身も世もあらぬ悲しさに、不覺の涙に袖を絞つて、身悶るのみであつた。

思ひ惱んで、靜に更けて行く、水の面を眺め入る時、遠寺の鐘の響が微かに打ち顫ゐて、それも今生の彼の暇に手向の哀韻とも思はれた。

彼は萬感交々迫り、悲しい追憶の瞑想に、たゆたへば忽然として、忘れ難い慧娘の楚々とした、花の姿が髣髴として、彼の胸を搔を亂した。幾度も〳〵、太息を漏して、心は取り止めも無く、唯過去の夢を駈け回るのみであつた。

萬籟寂として、聲無く、唯星の泪のみ雲間に瞬いた。

三

『今夜は怎うしたのだらう。不思議に獲物が無ゐじやねゐか』

老漁夫は艪を押す若者に呟いた。

『如何さま、妙ですねゐ』
『月は雲の中へ這入りやがつたし……』
『親方、何だか斯う氣味惡い寒氣がするじやごわせんか』
『生きて居やがる証據だい』
『うんにや、そうでねゐだ、親方』
『何だ』
『今夜こそ、てつきり、野郎、面を出しやがるに違ひねゐだ』
若者は首を縮め乍ら呟いた。
『何が』
『知れた事でさあ、でけゐ化坊頭の一件さ』
半空を掠めて飛んで行く、流れ星の火の一線を見て、ギクリと、し乍ら、聲を顫した。

『何だ、つまんねゐ』
老漁夫は嚙んで吐き出すやうに云つて、のけたが、何だか不安な予感を覺ゐて、消ゐて行く流星の跡を眺めて居る。
『じや斷めて、歸るとしやうか』
『ゐゝ、は、早くけゐりませう』
『じや、廻せ』
『おつと合點』
船は膏の樣に淀んだ水の上を滑つて、岸近く寄り添つて行く。艪に搔き亂された白い泡沫は飛んで、燦めいて、艪の音と共に躍つた。
『おい、一寸待て』
突如、老漁夫は叫んで、不思議さうに、湖づらを窺つてゐる。
若者は喫驚して、艪の手を止めた。

『で、出ましたか』
『ふむ、耳の迷ひかな、さ行け』
又、船は滑り始めた。
『や、や、や、水の音が』
遙に白〳〵泡沫が寂寞を破つた音と共に立ち上るのがあり〳〵と見ねた。
『ヒエッー、で、で、出やした。こ、これやごうしやせう』
船と共に、がた〳〵顫ねた。
『莫迦め、擾ぐない、行つて見なくちや、何だか、解らねねじやねねか』
『親方、串戯じやごわせんや。い、命が、お、惜しうがすわい』
『さ、船をあれに遣れ』
『ウェッー、それじや眞正に行く氣ですかね』
『勿論だ』

『ウェッー、ご、ご勘辨が願ねますめねか』
『妙な聲を出すない。行けと云つたら行かねねか』
老漁夫の一喝に、止むを得ず、顫ねる足を蹈みしめて、五體に力を入れて見たが襟もとから、ぞつと、寒氣がして、全身にみの毛が立つた、親方は小手を翳して、凝つと、眺めて居たが、突然、
『人だつ』
『ねゝつ』
若者は怖氣附いて、泣かん許かりである。老漁夫は搖ぐ波紋の只中を見つめて居たが、矢庭に猿肱を延して、何物をか、グイと、掴んだ。
『おい、手を貸しねね』
『おゝ、お助けを……』
『何だい、篦棒め、ごちらがお助けだい』

『こ、腰がた、た、た……』

『意氣地ねゑ野郎だ』

ぐいと、何物かを引摺り揚げた。

『それ、早く岸へ』

『ど、どうしやした』

『怎うも、斯うもあるものかい。早くしろつてば』

船は靜に岸に横づいた。

『さ、此の人を助けて上げやう』

『ウェッ、土左の助か』

『それ、枯草を集めろ』

若者は恐る〳〵、枯木や草を集めた。

『早く、燧を磨れ』

めら〳〵と、燃え上る火に、人の姿はあり〳〵と見ゑた。

『おや。別嬪だ』

『お、若い娘だな』

若者は思はず乘り出した。

『それ、背を撫でて上げよ』

『おつと、合點』

髪は亂れては居るが、色は飽く迄白く、これは容易ならぬ美人だわいと、老漁夫は思つた。

『濡れたものは脱かしやせうか』

若者は短衫を一寸外さうとしたが、軟かい肌が露に見ゑたので、一寸躊つて、不思議さうに軟くふくらんだ、瑪瑙のやうな白い肌を見入つた。

『綺麗なもんだねゑ』

『あたり前だい、手前のやうな、雞の脚みてゐなのこは、ちつたあ違はね』

『おや、親方、そりや酷いよ』

焚火は烈々として、一層燃ゐさかつた。

『さ、一緒にお祈りして上げやう』

片手で、撫で擦り乍ら、二人は銅鑼聲を揃ゐて、九天迄も聞ゐよと、許りに、吸鳴り立てた。

四

幸か、不幸か、淺瀬に陷ちた玉郎は苦しさに耐ゐかねて、岸の草葉に慥と慥り附いた。一縷の望は嫋々とした、一と本の莖に繋がれて、惡夢の醒めた睡後の驚怖にも等しい、戰慄に五体を顫はした。

深夜の夢驚かされた水鳥のハタ〳〵と飛び立つ影を追つて、彼も矢庭に這ひ上つた。しとゞに濡れた衣服を干すに由なく。岸の夜寒に悸ゐ乍ら、只、呆然と佇んだ。寂として、聲無い夜は打ち續くのみで、星の影のみ、氷り附く、夜寒の空に獨り瞬いて居る。

骨を刺すやうな痛烈な寒さに、今は身の置き所もなく、惱み悶ゐた。天の助けか神の惠か遙の岸に、赤く燃ゐ上る焚火を認めた彼は丁度、盲龜の浮木を得たと同じ喜びに燿いた。

彼は只管、赤い火を的に馳驅した。

『少し御免下さい』

と、ぬつと、手を差し延べて、貪るやうに身を翳した。

『おや、この野郎』

『ウエッ、で出やがつたな』

二人は余りの咄嗟の事故、ギョッと、して、立ち直つた。

『不思議なものではありません、夜路に迷つて、濡れた者です、暫く御慈悲に、仲間入りを許して下さい』

『ふむ、そうか、良いともく、それはお困りだらう、然し、お手前も、大分濡れて居るな』

ぢろり、と面を見ると、之も又、水際立つた、美しい若者であつた。

『今晩は不思議に、綺麗な、濡れた人に出喰すわい』

と、老漁夫は呟いた。

『殊によると、我々は騙されて居やしねんだろうか』

と、若者は又、怖氣ついた。

『おい、若い衆、若しや、お前さんのお連れではねわか、やつぱり、お前さんのやうに濡れた、美しい、娘さんを拾つたんだがな』

『わゝ』

『驚くこたあねわだ、お前さんの知んねわ人なら、仕方が無わが、今こちらは、懸命に介抱中だよ。袖振り合すも、何やらの縁とかで、お前さんも手傳つて、くんなせわ』

赤い火の隱に横つた手弱女の骸を一目見るなり、玉郎は迎天して、暫しは夢かと許り驚いた。

『慧娘！、慧娘！、』

彼は矢庭に冷い身體に抱き附いて、我を忘れて、叫び續けた。二人生と死を隔てゝ茲に邂逅した。夢か現か、魂は億土の黄泉地に遠ざからんとしてか、慧娘は只昏々として、眠るのみである。玉郎は驚きも、悲しみも、悶わも何も打ち忘れて、只茫然と自失の境に彷ふのみであつた。

還魂の祈の聲は天に通じたか、玉郎の聲音が魂に通じたか、美しい骸に一脈の生氣が流れてその愛くるしい唇から一縷の息が通つて、微かな呻きが漏れた。

月は雲間を出て、始めて翳影散じ、水は始めて、嫦娥の光に耀いて、隈なき光に四方の山々迄も窈窕たる英姿を現した。

太守の情

一

劉家の隣りの例の李榮は、只ならぬ劉家の擾きを聞き附けて、斯は必定、何事か出來たに違無いと思つたので、其の翌日、祕かに劉家の召使を呼び寄せて、若干の金を握らせ乍ら、昨日劉家の擾しかつた譯を尋ねた。召使は有りの儘に、騷動の顚末を語り聞せた。李榮は、扨ても珍しい出來事があつたものだ。是は良い事が耳に這入つたと、密かに喜んで、是を裴家へ告げ知らせたら、兩家の間には必定、確執が起るに違無い、さうすれば劉公も此處に居る譯に行かなくなつて、邸を安く賣り拂つて、居を他に引き移すに違無い。さうすれば自分の年來の望通り、劉家の邸を買ひ取る事が出來る。と、淺慮にも獨り喜んで、早速、裴九老の所へ行つて、一部始終を針小棒大に物語つた。之を聞いた裴家の喫驚は實に一方では無かつた。李榮は仕澄したりと云はん許りに喜んで居た。裴九老は立腹する事、一通で無く、

『過日來から、再三、輿入を申込んだのに、其都度、言を左右に託して、徒に荏苒、日々重ねた爲に、遂に取り返へしの附かぬ、こんな出來ごなつたのだ』

ご、嚇ごなつて、劉家へ駈けつけた、そして、言葉鋭く罵つた。劉家でも、慧娘を失つて、大騷ぎの折柄故、又立腹の余り、うんと罵り返へしたので、喧嘩に一層の花が咲いて、怒氣滿面に含んだ裴九老は、腹立ちまぎれに、强か劉公を擲つて、散々亂暴を働いて、歸つて行つた。

劉公は無念遣る方無く、

『怎うかして、此の鬱憤を晴らさなければならない』

ご、思つた。又一方、行方の知れぬ、慧娘を案ずる心痛があるので、夜の目も寢られぬ悶へに惱み苦んで、

『祕密にして、外へ漏れぬ筈のあの事が、程遠い九老の耳に、怎うして這入つたのだらう。もう、這入つたからには、既に世間の人が知つて居るに違無い』

と、想像して、彼は尙更煩悶した。

『是は斯うして居られない、娘の行方は、八方人を遣つて、搜しても、今だに杳こして、其消息も知れず、こんな事になるのも、皆あの憎き孫寡婦からだ』

ご、悲憤の涙に搔きくれ乍ら、

『もう世間へ知れてしまつたのなら、何も、人に匿して、難儀な思で慧娘を搜す必要はない。一層の事、お上へ訴へて、娘の行方を搜して貰はふ。その方が、早く手掛りを得るに違無い』

ご、思つた。して、又、

『斯んな惡謀みをした、孫寡婦を懲してやつたら、せめて、此の煮ゑるやうな胸も、幾分和ぐだらう』

ご、思つたので、稟子を作つて、お上へ訴る手筈をした。然し、劉璞は、

『暗やみの恥を明みに曝すやうなものだから、それは思ひ止る方がよいではあり

ませんか』

と、忠告したけれども、立腹して居る兩親は之を退けて、斷然と、其翌朝を待つて、願出る事とした。

二

扨て、時の杭州府の太守は、喬太守と云ふ人で、關西の產、人となり聰明、德望高く、その裁判は公平無私で、人々は彼を『喬青天』と呼び、神の如くに尊ひ、慈母の如くに慕つた。

劉公は稟子を携へて、府の門前に差しかゝつた時、裴九老も亦、稟子を提げて、やつて來た。そして、狀詞を携へて居る、劉公を瞥と見て、

『こは必定、昨日の喧嘩を根に持つて、自分を訴へるに違無い』

と、思つて大いに罵つて、

『やい、老碌、恥を言ふ事を知らぬか、娘を賣つて置き乍ら、人を怨んで訴へるこは何事だ此方こそ、貴樣を訴へる可き筈だ』

と、口汚く喚いたので、劉公は昨日の腹立ちの末だ癒にない今日の事故、燃上る薪に油を注いだかの如くで、彼は巽上つて、憤つた。

『奴、薄野呂めが、何を知るものかい』

と、叫ぶや否や、飛鳥の如く、飛び蒐つて、掴り附けた。裴九老も負けては居らずに、掴み蒐つて、二人は大道を轉び乍ら、上を下へと、立ち擾いだ。大切の狀詞も、何も、破れてしまつて、二人は遂に揉合ひ乍ら、府の堂内に轉び込んだ。

役人は此の樣を見て、大聲に叱呼して、

『こりや、不屆者めが、堂内にて喚き爭ふこは何事ぞ』

鶴の一聲に二人は、始めて、互に手を引いた。然し二人とも、顏と云はず、頭と云はず、腫れ上つて、その面は血が浸んで居た。

三

軈て、二人は眞白い敷石の坦々たる、嚴かな白洲に引き出された。待つ事暫しにして、正面の公案の前に、威風堂々たる、喬太守が現れた。二人は思はず、頭を地に摺り附けた。左右には皂隷、歩快が物々しく、づらりと、控へて居る。喬太守はいと嚴かに、壯重な口調で、二人を調べ始めた。

『兩人、名乘りを上げい』

『はい、手前事、姓は劉、名を秉義と申します』

『はい、手前事、姓を裴、名を九老と申します』

『裴九老、訴願の委細を述べよ』

『はッ』

裴九老は、グッと、唾を呑んで、

『手前の息子、裴政儀、本年十五才に相成りましたので、兼て是れなる劉秉義と約束の婚儀を取り行ひ度く、輿入れの儀を再三、申込みましたる所、言を左右に託して、娘の慧娘を遣しません。その内に右の娘は他の男と通じて、勝手に破約致しましたので、澤山のお金を取つて置き乍ら、斯かる擧に出るのは甚だ不都合と心得まして、明なお上のお裁を願ひたく、罷り出た次第で御座います。處で、昨日劉家に參り、その話しで、少しく爭ひましたる處、それを根に持つて、此の秉義が、私を訴へやうと致して居りますが、曲は、彼自身にあり乍ら、人を訴へるとは圖々しい次第と存じます故、只今も御堂の前で、その不都合を詰りました爲に、思はぬお援せを致しました次第。何卒、宣しく御調べの程を願ひ奉ります』

『劉秉義、其れに相違無いか、如何じや』

『はい、申上げます、手前には息、劉璞及び、娘慧娘の二人が御座います。娘は九老の申しましたる通り、裴政と許嫁でありますが、最初、九老から、申込んで來

た時は、息子が病氣で手を取られて居りました上に、道具が揃つて居りませなんだので、暫く待つて呉れるやう、願つたのでありました。其後劉璞の病氣中乍らも、婚儀を取り行ふ儀となりましたので、その式の濟み次第、娘を遣る決心で居りまして、その旨是れなる丸老へも、通じて置きました。このやうに、雙方承知の上で、延期したのでありました。處が、息子劉璞の許嫁なる、孫家の珠姨を申受ける段となりまして、先方は劉璞の病氣を憂ひ、延期を申込んで參りましたが、娘の婚儀も急いで居るので、傍々、早く取り行ひ度いとの希望を申してやりましたらば、先方も約束通り、娘を送つて呉れました。劉璞の病氣が未だ癒りませなんだので、兄の代理として、娘の慧娘を出し、擧式を致しました。尙、當方は新娘子が、獨り寢で淋しからうと慮つて、慧娘をして、一緒に寢さしましたる處、何ぞ計らん、新娘子と思つたのは眞赤な僞りで、先方は、娘の珠姨を遣さず、弟の玉郎に女裝せしめて遣したのでありました。そんな次第で、大切の娘は遂に操を失つたのみならず、その爲に、到々、家出までして、いづくに參つたやら、杳として消息も知れませんので、人を八方に遣つて、祕に搜しましたが、末だに手掛りはありません。それで致方なく、お上の御力に縋つて、娘の居所を搜して戴き、併せて、孫寡婦の非道な罪をも糺して戴きたう御座いますので、只今參つた次第であります。然る所、この裴丸老が何の辨へもなく、私に喰つて掛つて來ましたので、あのやうに御堂の前を擾した次第で御座います。怎うか、御慈悲を以つて、娘の居所を搜して下さいますやう、御願申上げます』

と、涙乍らに、懇願した。

喬太守は一部始終を聞き終つて、是は世にも不思議な出來事だと思つた。

『劉秉義、汝の訴への筋は確と聞き屆けて遣はす』

『裴丸老、汝の願の趣も、慧娘の行方分り次第、何分の穿議を致すであらう』

『今は兩名とも引き取つて、追つて何分の沙汰をする迄、兩名とも身を謹んで居

るやう』

と、申渡して、喬太守は中に這入つてしまはれた。劉公も、早速、聞き屆け濟と なつたので幾らか安い心持となつて、歸つて行つた。

四

數日の後、太守から、呼出しがあつた。劉公は取るものも、取りあへず、出頭した。

太守は、劉公に向つて、

『汝屆出の娘、慧娘儀、所在相分つたに付いて、申聞かせる事がある』

『エ、エッ、分りましたか。あ、有りがたうでございます』

と、俯し拜んだ。

『汝の娘は、過日、入水して、……』

『ウエッ、ヘッ』

彼は腰も拔けん許りに、打ち驚いて、蒼白となつて、後に尻もちを突いた。

『た、た、大變です。そ、それ……』

『默れ。靜に聽けよ』

『……』

『娘、慧娘は無分別にも、身を投げて、既に危く見ゐた處を、通り掛りの漁夫、江阿六と、云ふ者に助けられたのだ。江漁夫の行爲は洵に奇特の至りである』

『た、助かりましたか、あ、有りがたう』

と、掌を合せた。

『騷動の日の夕、玉郎も各所を徘徊して、圖らずも、娘の危急の場合に邂逅をなし漁夫に協力して、娘を蘇生せしめた事も相分つた。

『エ。エッ、玉郎めが』

と、又も喫驚した。

『何はともあれ、先づ、親子の對面をさし許す桂に、暫時、控ゐろ』

『ハ、ハッ、有難き仕合せに存じます』

劉公は夢に夢みる心地して、呆然と差し控ゐた。軈て、慧娘は、懐しい父の膝下に引き出されて、再び逢ゐると、思はなかつた人の前に、ハラ〳〵と、不覺の泪を溢して、手を支いた。

『おゝ、娘か』

感極つた、劉公は泪と共に、その手を握りしめた。血眼に、なつて、捜しあぐんだ、わが娘の無事な顔を見ることが出來る欣びに、何も彼も打ち忘れて、狂喜する許りであつた。

太守は部下に命じて、關係人、一同を呼び出す事とした。

軈て、召に應じて、孫家、劉家、裴家の人々が陸續と、白洲に現れた。又、一方慧娘と玉郎も同じく、首を垂れて、差し控へた。

孫寡婦も、太守からの召喚を命ぜられて、扨は例の婚儀の一件にて、叱責せられるに違無いと、察して、恐る〳〵、罷り出た所、計らずも、行方を心配して、夢寐にも忘れ得なんだ、我が子に、遇然にも、意外の處に、顔を合す事か出來たので、驚く事、一通りで無く、又、抱き附き度い程の喜びを凝と、耐ゐた。

扨て、太守は、廣い敷石の上に、處狹いばかりに、押し列んだ一同を見渡し乍ら、

『劉秉義、及裴九老からの訴訟により、一應の取り調べを始めるから、各自欺りの申立ての無いやう殊に注意せねばならん』

と、嚴かに申渡して、茲に公判を開始せられた。太守は先づ劉秉義に訊ねられた。

『男が女に假裝した所で、必ず、どこかに、異る所が、無ければならん。汝は何故、其處に氣が着かなかつたか』

『はい、申上げます。昔から多くの結婚がありましても、男が女に化けて來た例

はありません。殊に非常な、美貌でありましたので、私等夫婦は申すに及ばず、親戚、知己の方々までが賞讃して呉れました位ですもの、どうして氣が付く事でございませう』

太守は、玉郎と珠姨とを見ると、楚々とした、その容姿、花恥しい、その面容の頗る相似た所があつた。

今度は孫寡婦に向き直つて、

『汝は結婚の式に、何故、男を女に變裝さしたか』

『はい。申し上げます。彼れは、大病人の處へ行くのだから、三日經てば、一度還して、貰ふ約束で、遣る事に定ぬました。そこで、僅か三日位の事故、倅の孫潤を代理と、せしめました。それは萬一先方が娘を還さ無い時を慮つて、止むを得ず、あんな事を致しました』

『それが爲に、大切の處女を傷けた段は不屆千萬では無いか』

『はい。洵に恐れ入りました。然し、先方は三日經つても還はして呉れません、又、先方が勝手に、慧娘と、寢さしたのでございます』

『默れ、汝が男を遣しさへ、せ無かつたらば、斯んな、間違は起らずに、濟むのであつた。不屆者め』

ハツタと、睨み乍ら、叱り附けた。

『ハ、ハイ。恐れ入りました』

今度は劉公に對つて、

『汝の息子が重病であれば、何故婚儀を延期せなんだ、間違の發端は茲に在るのだ、如何じや』

『はい、實は妻が余りにやかましく申しまする故に、總て彼の言ふ儘に致しましたる次第で、へい……』

『馬鹿め、自分の家の一大事を、女の言ふが儘にすると云ふ事があるか、戯けめ』

『はい、はい、……』

太守は今度は玉郎に眼を轉じて、

『汝は男であつて、然も、女に變裝して、大事の婚儀に乘り込むことは不屈至極であるぞ、剩へ、大膽至極にも、處女を犯すことは、言語同斷、是より重い罪は無いぞ』

眼を瞑して、睨み上げ、激しく、叱咤した。

『はい、恐れ入ります。私は始めから、處女と通じる考は毛頭ございません。私が拒つたにもかゝはらず、劉妻は無理やりに、慧娘と一緒に寢る事を命じました。私は自分の罪の恐しさを感じたので、慧娘に總ての祕密を打ち開けて、逃げ出さうと致しましたる處、慧娘は袖を捉へて放さず、自分が祕密を守つて遣るから、心配する事は要らん。その代り今日の結婚式は、二人の眞正の式と致しませうと、申しましたので、私も、斯んな美しい娘さんから、情のある言葉を聞いて、も早、命も何も、投げ出して、夢心地で、その儘、寢ました』

『夫れは、汝の男である事を知らなかつたから、劉妻が無理に、寢る事を命じたのだ。又假令、一緒に寢ても、猥な振舞に及ぶことは何事だ。そこで、克己と、忍耐の力で、何故身を守ら無かつたのか』

と、太守は諄々として、說き諭した。玉郎は只管、恐縮して、頭を垂れて、咽び入つた。

太守は慧娘の方に向き直つて、

『女の道は節操を以て、其第一として居る。然るに何ぞや、玉郎が、男である事を告白したにも關らず、之と不義を致すことは何事か、玉郎が罪を犯したに付ては、汝も亦、其の一半の責は免れぬ事を承知して居るか』

『はい、洵に恐入つた次第でございます。總ての罪の本は皆私にある事でありまして、怎うか、玉郎樣を許して上げて下さいますやう、偏にお願申上げまする』

と、泪にくれ乍ら、哀願した。孫寡孫、珠姨、玉郎も之を聞いて、共に咽び泣い

た。

『汝は將來、怎う身の振り方を付ける考か』

『はい。私は二人の夫に仕へる譯には參りません。玉郎樣の外に、私の夫はございません。お慈悲でございます。怎うか、孫家へ行く事を御許しなさつて下さい。それで無ければ、私の生きる道はございません』

慧娘の一言一句は肺肝を貫いて、迸り出る、血と、涙の叫びであつた。嚴かな白洲は濕やかな雰位氣と變つて、其處、此處に欷歔の音さへ、漏れた。

太守は丸老に對つて、

『如何に丸老、慧娘は汝の處へ行く事を欲せぬ樣子、だが、汝は如何に考るか』

『いや、もう、那樣、汚れた娘は要りません。此方からきつぱり、御斷り申上げます』

裴丸老は憎々しげに、言ひ放つて、瞥りと、劉公の顏を見た。

太守は玉郎に、

『汝の許嫁は何處の誰か』

『はい、私の許嫁は、徐雅の娘、文哥と申すものであります』

そこで、太守は徐雅と、其娘、文哥をも呼び出した。

五

文哥も妍娟、花を欺く美容であつた。冷い白洲にも、今日こそは、時ならぬ駘蕩の霞か漂つて、紅白の花が娟を競ひ、香を爭ふかのやうで、窈窕の美、馥郁の香、嬝々の嬌、と現る妖艶の精を集め、粹を拔きすぐつたやうで、居並ぶ役人さへも、只陶然と、する許りの狀態であつた。

太守は徐雅に向つて、

『今日の出仕、大儀である。是なる、玉郎は其方の娘、文哥と、許嫁の仲である

と、言ふが果して、左樣か』

『はい。その通りでございます』

今度は、玉郎と、慧娘に向つて、

『汝等兩名に殊と言ひ渡して、置く事がある。能く心して承れよ。身體髮肌、敢て毀傷せざるが孝の始めである、と言ふ事を知らぬか。況んや身を捨てやうと、する了見は人の道で無い五倫の教を見よ、五常の垂訓を知れ、皆、孝を以て、第一とするではないか。

汝等、幸にして、再生の惠を受けて、今日在るのである、今後は過去の罪を拭ひ取るやう、積善の余德を作らねば相ならん。別して、慧娘は江阿六の洪恩を忘れてはならない。兩名とも將來、心して、行かねば相ならんぞ』

と、諭し聞かせた。兩名は唯、頭を垂れて聞いて居たが、太守の言葉に感激の意を閃めかした。

『江阿六に、一言申し置く。汝、身を棄てゝ仁をなす。その行爲の奇特なるは勿論である。剩ゝ貧しき暮しの、汝が家に引き取つて、手厚い世話を爲した事は余の感心する所以である。追て、恩賞を取らすべければ、今日は之れにて、立ち歸つてよろしい』

と、漁夫の奇特な行爲を激賞した。

六

扨て、太守は一同に向つて、いと、嚴かに判決を申渡した。

『玉郎變裝の罪は、母、孫婦の命令によつた事故、本人に、その罪を問はぬ。其の處女と、通じた罪は、之を免れる譯には行かぬ。故に、文哥との許嫁を取り消す可く命ず。慧娘はその希望通り、孫家に入り、玉郎と生涯の契りを結ぶ可し』

玉郎と、慧娘は、躍り上らんばかりに、喜んで、太守を伏し拜んだ。裴九老は不

平顔で、

『申上げます。奸夫、淫婦の罪を許して、剩ね、之を夫婦と致しますやうならば此の世は全くの闇と、言はなければなりません。之は公平の御裁きとも、覺ねませぬ』

『默れ、丸老、舌長し、罪を憎んで、人を憎まず、之れ、政道の第一義じや。徒らに、人を苦めるのが、余の本意では無いわい』

一同は情ある太守の言葉に感激して、其寛大な裁決に狂喜した。中でも、王郎と慧娘の欣びは、譬へるに、物なく、唯、ハラ〳〵と、感涙に咽ぶのみであつた。太守は尙、言葉を繼いで、

『珠姨は約束通り、一刻も早く劉家に嫁す可き事、文哥は裴政に遣しては如何じや、之は裴家と、徐家との自由に任す』

不平面をして居た、裴丸老も、太守の行き屆いた、言葉を聞いて、大變喜んだ。

慧娘に勝るとも、劣らぬ文哥を貰ふ事が出來るのであれば、此の上も無い、仕合せと、思つた。

『有り難うございます。徐文哥を貰ふ事が出來ますれば、他に何の望みもありません』

と、莞爾として、頭を下げた。徐雅も答ねて、

『私も異存はありません』

と、申し上げたので、茲に、芽出度く、總ての解決が附いた。太守は、

『然らば、余が媒酌の勞を取つてやらう。これにて、孫家と劉家、劉家と裴家の爭は今日限り、水に流して、今後は親睦を圖ねば相成らん』

喬太守は判決の書を作製して、之を押司に朗讀せしめて、茲に大團圓となつた。その書は次の通りである。

弟代姉嫁。姑伴嫂眠。愛女愛子。情在理中。一雌一雄。變出意外。移乾柴近烈火无怪其然以美玉配明珠。適獲其偶。孫氏子因姉而得婦。樓處子不用踰牆。劉氏女因嫂而得夫。懷吉士終非衒玉。相悅爲婚。禮以義起。有厚者薄。事可權宜。使徐雅別壻裴九之兒。許裴政改娶孫郎之婦。奪人婦。人亦奪其婦。兩家恩怨。總息風波。獨樂樂。若不與人樂。三對夫妻。各諧魚水人雖兌換十六兩。原只一斤親是交。門。五百年決非錯配。以愛及愛。伊父母自作氷人非親是親。我官府權爲月老。已經明斷。各赴良期。

（著者曰く、右文案は原文、その儘のもので、今尙、人口に膾炙せるものである）

一同は頭を地に摺り附けて、拜聽し、皆、大滿足であつた。太守は言葉を和げて、

『芽出度く茲に、三組の夫婦の赤繩を結ぶ事が出來た。皆、幾久しく、睦みあひ

常盤の色の深みごり、變らぬ操を後生大切ミ、忘れぬやう。互に節義を厚くして、一家の和合を圖り、各、その業務に勉んで、家を富ます事を、專ら念ごせなければならない。余は特に、汝等、將來の多幸なる事を祈るご共に、祝の引き出物の代りごして、茲に一言する譯である』

ミ、語り終つて、眼の醒める樣な、美しい模樣ある、紅の絹、三匹を取り出さしめて、

『之れは、ほんの印までに、各に取らして得さす』

ミ、三組の夫婦に、それ〴〵、被けしめて、又、三組の樂人に命じて、それ〴〵喜びの調を高らかに奏ぜしめた。三個の花轎の中に、三人の新娘子を容れ、件の樂人を最先きごして、それ〴〵、關係の新官人や、親達が附き添つて、賑やかな奏樂の裡に、家路へ向はしめた。

春の宴の盃に

歡樂の血を躍らして
洩るる胡琴の妙音に
平和永却の調あり
春秋無限長樂の
基は茲に定まりて
操の色の深みごり
變らぬ千代の壽を
契るや深き鴛と鴦
賢主明智の裁決に
鼓腹の民の歡喜あり
英主讃美の涙あり
江水逝きて止まらず

流れて遠き九百年
名は後までも謠はれて
殘るも床し喬青天

杭州府中の人々のみか、遙な遠鄕の人までも、此の話を傳へ聞いて、太守の仁慈明智の裁きを涙無しに、語る者は無かつた。又彼等三組の夫婦は勿論、その親々や親戚まで、太守の高恩に感激して、皆々孜々として、家業に精を出し、幾久しく平和の歳月を送つた。劉璞と玉郎は其後間もなく、秀才の役に登用されて、その名は隆々として、人々に知られた。

李榮は劉家を禍ひせんと思つて、孫家と裴家に内通して、秘かに其の確執を望んだ所が、此の太守の賢明なる裁決の爲に、三家は互に親睦の暖味を增し、家は益々富み、位は益々高くなつて、世の人々からの尊信の的となつたので、遺の彼も内に省みて、恥かしさに耐ねかねて、悄然として、何處ともなく、出奔してしまつた。

後程、劉璞と玉郎は、狀元の官吏になり、其名は遠く迄知られた。

裴政も亦、官吏となつて、名を揚げた。李榮の家は遂に、劉家が之を買受けてしまつた。

天は遂に、惡人に組みせなかつた。後世、或人の詩に、

爲人忠厚爲根本、　何若刁讒欲害人、
不見古人卜居者、　千錢只爲買鄰鄰。

と、又、喬太守を謠つた詩に、

鴛鴦錯配本前緣、　全賴風流太守賢、
錦被一床遮盡醜、　喬公不枉叫青天。

と、以て太守の名聲は後世長へに其名を竹帛に垂れ、其賢慮は以て、長く、世の爲政者の鑑とはなつた。

（完）

譯餘間語

一　原音人稱

◇劉家の人稱

劉　秉　義　リユウ、ピンニー　（父親）
劉妻談氏　リユウ、チデヅ　（母親）
劉　璞　リユウ、ボ　（息子）
慧　娘　ウエニヤン　（娘　）

◇孫家の人稱

孫　惟　セン、アン　（父親）
孫寡婦　セン、クオウ　（母親）
孫　潤　セン、ゼン　（息子）
王　郎　ニヨロン　（同人字名）
珠　姨　ツーイ　（娘　）

養　娘　ヤンニヤン　（乳母）

◇裴家の人稱

裴九老　ビ、チユウロウ　（父親）

裴　政　ビ、ツン　（息子）

◇徐家の人稱

徐　雅　ジ、ヤ　（父親）

文　哥　ブンク　（娘　）

◇其の他の人物

張六嫂　ツアン、ロソウ　（劉家媒人）

李　榮　リ、ヨン　（劉家隣人）

喬太守　チヨ、タシユ　（役人）

江阿六　コン、アロ　（漁夫）

二　原語解譯

養娘（ヤンニヤン）　乳母の義。

新官人（シンクエニン）　新聟さん。

新娘子（シンニヤンツウ）　花嫁。

大官人（ドウクエニン）　若旦那。（召使等が主家の息を呼ぶ敬稱語）

小娘子（ショウニヤンツ）　（年長者から身分の低き女を呼ぶ稱語）

大娘（ドウニヤン）　（召使等の低い身分の者から主婦を呼ぶ敬稱語）

粧奩（ツアンリエ）　嫁入の道具。

令愛（リンエー）　（對者の娘を呼ぶ敬稱語）

女壻（ニユシユ）　聟さん。

八盒茶菓（パアカンク）　結婚の際、嫁の家へ贈る可き八種の禮物の義。

姆媽（ウンマ）　お母樣。（小供が母親を呼ぶ稱語）

喜筵（シイエ）　結婚の際の酒宴の招待狀。
鞋襪（アマ）　靴と靴下。
鞋子（アッ）　靴の義。
蓮步（リヅ）　女の優しい步み振り。（語原は、隋の煬帝が金造の蓮花を地上に挿し官女、潘妃をして、それを蹈み舞はしめた處からの起りなり）
萬福（ウエフヲ）　女と女との相逢つた時の挨拶の語。
花轎（ホジヨ）　結婚の時に用ふる駕籠
裙子（ヂンツー）　支那婦人の袴。
嫂々（ソウッウ）　兄嫁を呼ぶ稱語。
嬪相（ピンシヤン）　結婚式の時に雇入れる世話方。
樂人（ロゼン）　音樂を奏する人。
鼓（ク）　太鼓やつづみを云ふ。

簫（ショウ）　樂器の稱。（笛の類）
笙（サン）　樂器の稱。
皮箱（ピシヤン）　皮張りの箱。
帳子（ツアンツ）　臥床に掛ける幕。（蚊張の如き物）
丈夫（ザンフ）　夫の義。
姑娘（クニヤン）　（妻が夫の妹を呼ぶ稱語）
鼓樂（クロ）　音樂。
新房間（シンヂンケー）　花婚、花嫁の居間。
太守（ダシユ）　縣知事の如き役。
押司（アス）　公印を掌る役人。
步快（ブクワ）　探偵の如き役人。
皂隸（ゾディ）　白洲の取締をする役人。

公案（コンシウ）　白洲にて、太守の凭る机台の事。
尒（ニン）　あなた。
秀才（シユウゼ）　官名。（判任官と言ふが如きもの）
登科（トンク）　狀元の役の試驗に合格する事。
稟子（リンツ）　お上への願狀。
短衫（ツウセ）　支那人の上衣にして短いもの。

『附錄小說』

復讎

はしがき

支那の社會程貧富の懸隔の甚しい生活は尠からう。其のドン底の生活は恰も原始の古を偲ばしめるやうなみじめさで、全く我々には驚異の眼を瞠かすのであるが、然し古來から『清貧』等と言つて、樂亦其中に在りと、欣んだ古聖賢の國故、その位の事に驚く方が間違つて居るのであらう。處で彼等にも、春風秋雨の惠みもあれば、若いローマンスの譚りも數多くあるのである、私は今其の面白い出來事の一つを書いて、異つた風習の一端を御紹介したさに、貴重な餘白を汚した罪を予め御詫びする次第である。

大正十三年春三月

萍水

復讎

一

蒼茫たる江蘇の曠野を縫つて、潺々と、黄浦灘に注ぐ水を稱して蘇州河と云ふのだ。

『太湖の水溢れて走る蘇州河』

これは句になつて居るか居ないかは知らぬが、その蜿々としてめぐる川水に、通ふ白帆の影が曠茫たる平原を悠々と運ぶ所、全く雄大と云ふより外に形容詞を持ち合さぬ。

蘆花曉風に散じ、茅屋參差として、炊烟立ち搖ぎ、水牛の群れ遊ぶ所は詩の原料

こして中外に輸出されそうである。筏は間斷無く岸の青柳の糸に見ゑ隠れて、その中春の地に接近するにつれて、空氣は追々煙り臭くなつて、船舶は益々輻湊する。殊にわらじ虫のやうに苫船が密集して、其處には水上生活の幾萬の世帯が細い煙を揚げて居るのは一つの奇觀である。南船北馬の言の葉も、此の狀態を見てこそ、始めて首肯かれるのである。この畔り林の様に立ち並んだ煙突の根もこには、幾萬の勞働者がその雄牛の叫ぶやうな悲痛な唸りにコントロールされて、朝に、夕に、潮の差し引きするかのやうに蠢いて居る。それ等の生類は主こして遠く長江の北野から遙々移住された、所謂江北人（コンポニン）こ稱される者が其の多くを占めて居る。彼等は腕の續く限り、身體の許す限り、男も、女も、共に稼いで、其の汗こ膏で得た金を貯えては、故郷に錦を飾る日を樂んで、只孜々こして倦まず、撓ます、働いて居るのである。

所で彼等の生活はこ云ふこ、又、これ程簡易なものも恐らく尠からう。一人一日の生活費は十五仙位なものであるこ云ふから、其の安直さも無類であらう。驚く勿れ、彼等一戸の家屋健造費は、大枚五圓也。其の造作は推して知る事が出來るであらう。先づ、普通は四本柱に苫を張つて、藁で取り圍んだもので、それに石等をぶらさけて、重みを附けて居る。人ならば二人か三人が漸く這入り込める位が普通の處で、もつこ狹いのも、又、多少ゆこりの有るのもあるが、先づ深山の炭小屋こ思へば間違は無からう。其の多少上等なものになるこ、破れ船を繕ふて、苫を張つた物等もある。それが又陸こ云はず、水の上こ云はず、矢鱈に密集して、必ず部落をなして居る。其の狹い、低い、穢くろしい中には必ず家畜を養つてゐるのが又妙である。卽ち、人間も、犬も豕も、雞も、同じ臥床に夢を結ぶのである。其のせゝこましい事は讀者の想像にお任せしよう。

以下私の述べやうこするのは此の江北人（コンポニン）の間の實際の出來事である。

二

藁屋の軒にも春は訪れた。朧の月影は高い、低い、不揃の蔭を參差と地に投けて、油の様に淀んだ水の上にも、あざやかな影を漂して、川づらに流れる若人の哀調が染み〳〵と、白蘭花の薫る、搖籃の空を涙ぐましく思ひ浮べる夜であつた。

姉在呀、房中呀、打牙牌、
忽聽得門外才郎來、
雙手兒把門開、噯々吓、
雙手兒把門開、……
天牌呀、地牌呀、奴不愛、
只愛那人牌抱在懷、
跑進奴房裡來、噯噯吓、

跑進奴房裡來。……
叫一聲、情哥々、休動手、
小妹々年輕花末開、
能看呀不能採、噯々吓、
能看呀不能採。……
等到呀、來年呀、春三月、
桃花杏花梨花兒開、
小妹々掛招牌、噯々吓、
小妹々掛招牌、……

……

『おい、阿大戻つたかい』

藁小屋から、ぬつと、首をつき出して、或る麵粉廠に通ふ筋向ひの男に聲を掛け

た。

『ふむ、和子かい、今戻つた許りだい』

『ごうだい、一ど勝負出掛けろかい』

『よからう、あすは休みだから』

『飯はすんだか』

『今塔餅をやつ付けた許りだ』

『じや支度はよいか』

『おゝ』

二人は部落の寄り場であり、又一同の慰安場である、茶館へ出掛けた。云ふ迄も無く、彼等の大好物な賭博の輪贏を爭ふのであつた。

三分蕊のランプが三つ附けてある茶館は彼等の憧れる明るいカフエーであつた。

處で奥の間には同氣相求むるの士が既に、車座となつて居る。

『ごなたも御免なせい』

二人は其の間に別け入つて、麻雀の札を握り初めた。阿大は今宵の勝負には運がつかなかつたのか、瞬たく間に、持ち金を卷き上げられてしまつた。焦々する氣で人の遣り取りを見て居る譯にも行かず、氣を腐らして立ち上つた。

『和子、俺らもう歸るだ。てめねもごうだ』

『いや待つて吳れ、少しは取り返さなくちや歸れねゐだ。濟まねゐが一ど足先きに行つて吳れ』

『じや歸るよ、さよなら』

敗殘の士は悄然と歸つて行つた。和子は何ごか大勢を挽回し度いものと、血眼になつて奮戰して、夜の更けるのも忘れて居た。

『箆棒め、運の附かねェ事をごこまでも、ねこじになりやがつてさ、つまんねェ事だ』

と、吃き乍ら、羊腸とした藁小屋の細徑を朧の月影蹈んで、歸つて來た。犬は尾を振つて主人を迎ねたが、妻は襤褸の中に身を埋めて、白河夜船と高鼾である。

阿大は舌打ちし乍ら、手搜りで瓶を下ろして、高粱酒の燃るやうな奴をキュッと ひつかけた。蕩然として心の焦らちが去つたが、まだ眠る氣にもなれない。顏をつき出して見ると、筋向ひからは仄かな明りが漏れて居る。つかぐと寄り添つて、窺いて見ると、和子の若妻は小燈しの明りに半面を赤く染めて、錫箔の手内職にせつせと餘念もない。

『姐さん、ごねらい勢を出すじやねねかい』

『おや喫驚した。誰かと思つたら、阿大さんかい。宅の人はまだなの』

『阿兄は末だ〳〵是れからが洞が辻さ』

『じや、お前さんはね』

『俺かい……云ふまでもねねじやねねか』

『云ふまでも無く摑んごいでたのかね』

『箆棒め、摑んで先きに戻る奴があるかい』

『じや、取られちやつたのかい』

『あたり前よ』

『おほゝゝゝ大層な險幕だ事』

『姐さん、仕事なんかつまらねね、よしなせえ。お前が幾ら稼いだつて、野郎すつかり運んじまふのだから』

『是れでも、おまんまの足しさ、恁那事でも爲なくちや、明日から旱乾になつてしまふじやないか』

『おまんまの足しなら、もつと氣のきいた事がありそうなもんじやねねか』

『さあ、それが無いから、恁那に苦勞もするのさ』

『箆棒め、同じ苦勞なら、もちつと早道を知らねねか』

『教ねておくれよ』
『教ね無くても、知つて居さうなもんだに』
『チコイコロつて知らねねのか』
『チョイコロだつて、そりや初耳よ』
『箆棒め、間抜けちやいけねねぜ』
『間抜けは生れつきよ』
『知らねねか、チョイと轉ぶのさ』
『あれ、冗談およしよ』
『冗談なんか云ふものか、本當の處だい』
『阿呆らしい、斯那おかめが轉んだ處で、鐚一文這入るじや無し、屋根裏の塵りが落ちる位の處よ』
『處で、そうでねねだ、阿六のお神さんは、あの面で仲々うまいんだつてよ、親爺の夜業中には中々の臍繰りを拵へるんだそうだい』
『ねゝッ、そうかね、人は見かけに寄らないものだねね』
『だからさ、お前さんの器量じや、誰だつて嫌てふものはねねんだからね』
『嫌だよう、この人は』
『だからさ、短い一生だ、長い時間をぶつつぶして僅か取るより、チョイの間にうんと取るのさ』
『あれ、嫌だよう、そんなに這入り込んでは』
『そう嫌がるにやあたらねねよ、取つて喰はふとは云ふめねし』
『宅が歸ると八釜敷しいことよ』
『何に大丈夫、末だ歸りつこはねねんだ。話す位は構ふめね』
『だけごもねね』
『じや歸らう、大きにお邪魔さま』